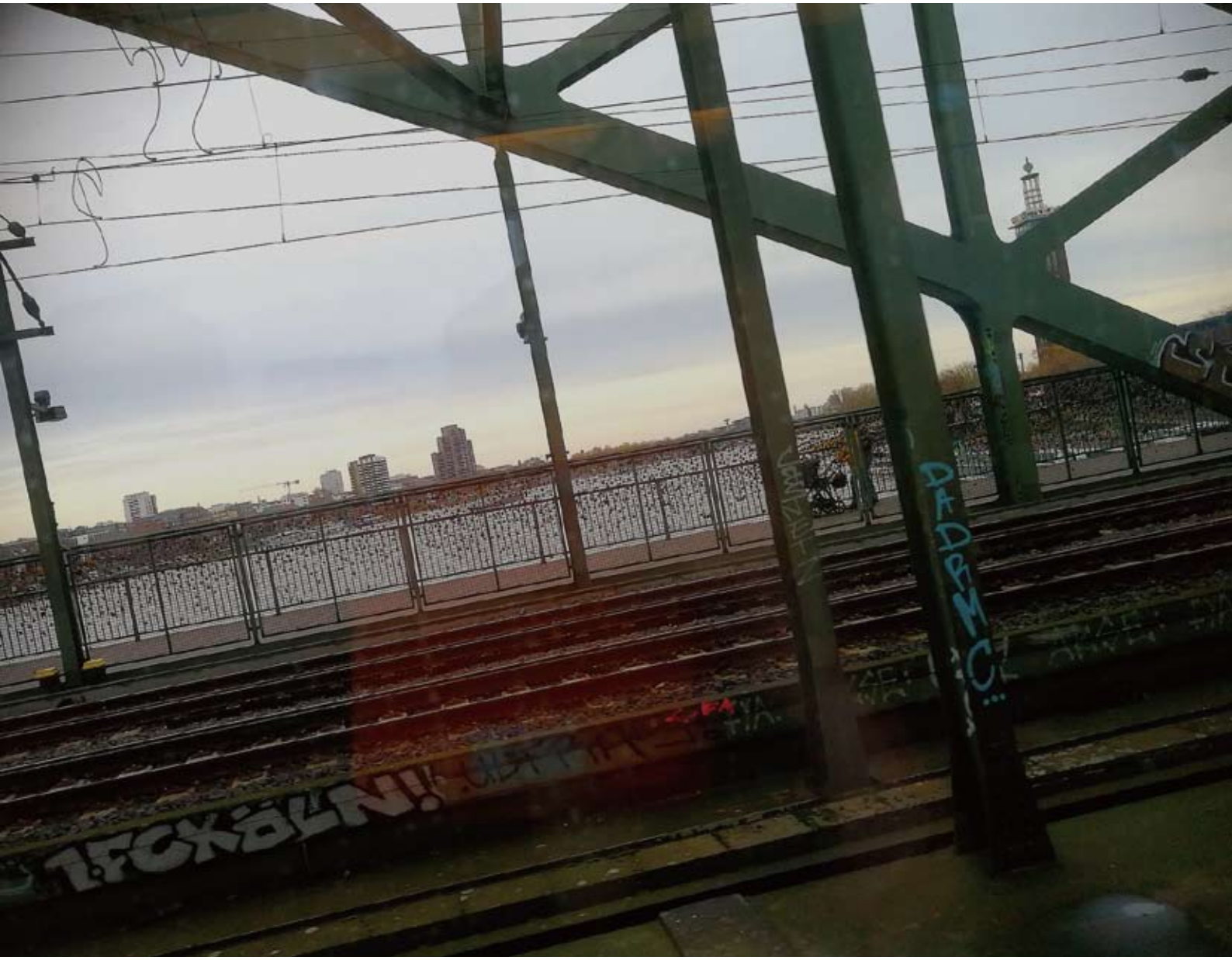
「Die Brücke 架け橋」第712号 令和２年６月１日発行（隔月刊）公益財団法人日独協会

Japanisch-Deutsche Gesellschaft

Die Brücke 架け橋

日独協会機関誌



2020 6

Zum Titelbild

Dieses Foto entstand letztes Jahr im Dezember auf dem Weg nach Düsseldorf, wo ich am JLPT (Japanese Language Proficiency Test) teilgenommen habe. Ich weiß noch, wie ich an diesem Tag 40 Minuten in der Kälte auf die verspätete Bahn gewartet habe. Es ist jedoch alles gut gelaufen und ich habe die Prüfung mit Erfolg absolviert. Warum habe ich ausgerechnet dieses unscheinbare Foto ausgewählt? Es drückt aus, was ich in den letzten Monaten empfunden habe: Der Wunsch, in die Ferne zu reisen, ohne sich Gedanken machen zu müssen. Einfach unbedarft das Neue entdecken, Inspirationen sammeln, der Wunsch nach Normalität. Was wir aktuell erleben sind kleine Schritte in diese Richtung. Geschäfte haben wieder geöffnet, man kann seit letzter Woche ins Museum. Allerdings alles nur unter der Voraussetzung, dass jeder Mundschutz trägt. Während des Lockdowns habe ich jedoch auch die Chance entdeckt, neue Herausforderungen zu finden und von innen heraus Inspiration zu erlangen. Nicht jeden Tag sich mit den Dingen, die außen stattfinden, auseinanderzusetzen sondern mit den Dingen, die in einem selber täglich stattfinden. Herauszufinden, wer man wirklich ist, all das habe ich im April zu schätzen gelernt.

Anna-Lisa Schmidt（ehemalige Praktikantin der JDG）

表紙の言葉

この写真は去年の 12 月、JLPT(日本語能力試験) を受けるため、デュッセルドルフに向かう途中で撮ったものです。この日どのように、遅延した電車を寒さの中で 40 分も待ち続けたのか今でも覚えています。とはいえ後のことはすべてうまくいき、試験には合格しました。なぜよりによって、この取り立てて特徴のない写真を表紙に選んだのかといえば、私がロックダウン中のここ数か月、感じ続けてきたことを、この写真が表現しているからです。つまり何も難しいことを考えず、遠くへ旅したいという願いです。単純に、無邪気に何か新しいものを発見して喜び、様々なインスピレーションを拾い集める、いつもの生活への願いです。ドイツにいる私たちが今まさに体験しているのは、そのような方向へのわずかずつの歩みです。店の営業は再開し、先週からは美術館にも行けるようになりました。ただしすべて、マスク着用という条件つきです。ロックダウンの間は、新しくチャレンジするものを見つけ、そこからインスピレーションを引き出すことを学ぶ、チャンスでもありました。外の世界でおきていることではなく、自分自身の中で日々おきていることと向き合うこと、本当の自分を探し出すこと、それらすべての大切さを 4 月に学びました。

アナリザ・シュミット（日独協会 元研修生）

目　次　　ページ／ Seite　　INHALT

巻頭言 黒川　剛	1	**Vorwort** Tsuyoshi Kurokawa
特別寄稿 1：フランツ・メッツガー（Jr）の体験した戦時下の横浜、野尻湖（後編） 大堀　聰	2	**Beitrag 1 Franz Metzgers Erlebnisse in Yokohama und Nojiriko aus der Kriegszeit** Sou Ōhori
ドイツ経済の動き 伊崎　捷治 **文化の玉手箱 映画紹介『お名前はアドルフ？』** 田中　麻優	4	**Tendenz der deutschen Wirtschaft** Shoji Isaki **Kulturkiste: Eine Filmvorstellung „Der Vorname“** Mayu Tanaka
シリーズ：ベートーヴェン生誕 250 周年記念 第一回：ベートーヴェンとその時代 平野　昭	6	**Reihe : Zum 250. Geburtstag Ludwig van Beethovens (1)** Akira Hirano
私とドイツ 佐藤　由木子	9	**Deutschland und ich** Yukiko Sato
特別寄稿２：ドイツ語が繋ぐ道 ードイツ修士留学とその後ー 田口　季京 **文化の玉手箱 映画紹介『コリーニ事件』** 菊池　菜穂子	10	**Beitrag 2 Der Weg mit der Sprache: Masterstudium in Deutschland und danach** Kikyo Taguchi **Kulturkiste: Eine Filmvorstellung „Der Fall Collini“** Nahoko Kikuchi
シリーズ：ドイツの鉄道 14 久保　健	12	**Reihe : Die deutschen Bahnen und Züge, Teil 14** Ken Kubo
モヤっとドイツ ーミュンヘンでの生活を通じてー 柳原　伸洋	13	**Unklar!** Nobuhiro Yanagihara
学校では教えてくれないドイツ語 Vol.2 河内　秀子	14	**Deutsch, das man nicht in der Schule lernt (2)** Hideko Kawachi
ベルリナー・ルフト Dr. ヴェレーナ・マテルナ	16	**Berliner Luft** Dr. Verena Materna
研修生のコラム『踊る星をさがして』 山田　ダニエル	17	**Die Kolumne des Praktikanten „Suche nach tanzenden Sternen“** Daniel Yamada

てんやわんやのヨーロッパ

黒川　剛（元駐オーストリア大使・日独協会会員）

今年、欧州人の眼は、英国がEUと今後の相互関係についてどのような合意を取り付けられるかに注がれる…はずであった。しかし「コロナ」様の御登場ですべては吹き飛んでしまった。火元は湖北省武漢だが主戦場は今や西欧と米国であり、四月末現在、イタリア、スペイン、フランスの地中海沿岸三国だけでも感染者数70万に達し、致死率も10%をはるかに超えている。

ドイツは防疫態勢が整っていたこともあって健康管理面での損害は少ないように見えるが、経済社会活動が大幅に停滞した場合の将来への不安は、周辺諸国や日本に劣るものではない。三月末の「シュピーゲル」誌は83ページにわたって「欧州はなぜ連帯できないのか」に始まり「サッカー欧州杯戦は実施できるか」といういかにもドイツ的なものを経て「イエスはコロナについてどう言うだろうか」なる些か怪しげなものまで49の問をかかげ、識者の見解を紹介している。

たとえば基幹産業である自動車業界の生産・販売活動が休止すれば、エンジンから螺子にいたる部品を納めている何層にもわたる大小の関連業者が将棋倒し（「ドミノ倒し」というべきか）に破綻し、何十万もの労働者が路頭に迷うことになる。そのため国内各方面から、外出禁止のような経済の停滞につながる措置は取らないでほしいという声があがった。大連立政権は大企業と労働組合の利益のみ考えて現実にドイツ経済を支えている中小企業を無視しているのではないかという批判も聞こえてきた。

にもかかわらず連邦政府は断固として「ステイ・ホーム」政策をとる。そのうえでメルケル首相はテレビを通じて「（東独出身の）私は、（移動の自由を含む）人権を安易に制限してはならないことはよく知っています。しかし命はもっと大切なのです」と国民に語りかけて理解を求め―そして成功した。やや低迷していた世論調査での首相支持率は79%まで跳ね上がった。もう一度「母ちゃん」に任せてみよう、ということになったのである。

ところで「シュピーゲル」が問うた「欧州の連帯」のほうはどうなのだろうか。上に挙げた三ケ国は犠牲者が多いだけでなく財政余力も乏しいため、何らかの救済協力措置が必要である。「ユーロ債」のようなものを発行して各国が債務を分担すればよいという主張もあれば、現存する融資制度を活用すれば十分だという主張もある。後者はドイツやオランダ、北欧諸国の姿勢であり、地中海諸国からはユーロ危機の際と同様われわれに冷たいではないかと怒りの声が聞こえてくる。「北の金持ち」と「南の貧乏人」の対立という例の図柄である。そういえば、「イタリアに大蔵大臣がいるのだから海のないスイスに海軍大将がいてもおかしくないではないか」というかなり「差別的」なジョークもあった。この件は四月末になってメルケル首相の采配で１兆ユーロ規模の「復興基金」を設けることで一応の決着を見たと報ぜられる。

かくてメルケル首相は内外ともにあらためて強い実行力を示し「女帝復活」などと言われている。実は「北」の国々たとえばデンマークやフィンランドの首相も女性であり、更には問題解決を主導すべきEU委員長も欧州中央銀行の総裁も女性である。ヨーロッパの女性恐るべし。シェイクスピアもハムレットに「弱きものよ、汝の名は女なり」などという科白を吐かせたことを悔やんでいるだろう。

閑話休題。コロナ騒ぎの当初、EU各国は相互の調整なしに国境の封鎖や医療器具の輸出禁止などの措置をとり、共同体もここまで崩れてしまったかと思わせた。ユーロ危機や難民問題に続いて三度目の正直で、EU解体も近いかといった声すら聞こえてきた。これに対し、スタートこそやや躓いたものの今回の危機は加盟国の連帯の重要さを改めて認識する契機となりつつあり、災いを転じて福となす機会ではないかという楽観論もある。

域内にはかねてから、原料や資材の供給・生産さらには製品の販路まで特定の外国に依存しすぎている危険を指摘する向きもあった。今回の危機はそれを実証した感があるが、産業体質の転換は容易ではない。しかも火元であった中国などは医療技術者や大量のマスクを送り込んで良い顔をしようとし、以前から「一帯一路」に参入しまーすと手をあげていたイタリアなどでは、冷たい隣人より遠くの温かい友人だと歓迎している。

「日はまた昇る」のだろうか。それはいつなのだろうか。日本にとって21世紀の新たな世界秩序形成には欧州との提携が不可欠だが、地球の裏側に住む我々は当面同情と友情をもって遠くから見守るほかない。

フランツ・メッツガー（Jr）の体験した戦時下の横浜、野尻湖（後編）

大堀（おおほり）　聰（そう）

野尻湖への疎開

メッツガー家が野尻湖に疎開した事情はジュニアが筆者に語ってくれたところによると、次のようだ。

長男のカールが 1944 年以前に何度か学校のキャンプで野尻湖を訪れていた。また 1943 年には一家で夏を過ごした。父フランツがカールに「どこに疎開するか、軽井沢それとも野尻湖？」と聞いたのに対し、カールは野尻湖と答えた。理由は軽井沢には特に何もないけど、野尻湖では冬はスキーが出来て、夏はセーリングや水泳が出来るからであった。

そして多くの外国人が野尻湖に来なかったのは、冬の雪のためだと思うとジュニアは語る。ジュニアはこの時 9 歳であったが、1944 年と翌年の冬は大雪で 2 メートル以上積り、湖はしっかり凍り、歩いて渡ることができた。野尻湖に疎開してきた他の者はその寒さ故、ひと冬を過ごし、終戦後はすぐさま去った。

つまり冒頭の 3 家が、申し合わせて野尻湖に疎開したわけではなさそうだ。ただし偶然 3 家が野尻湖にそろったのは、日本人の妻という要素が大きいと筆者は考える。箱根、軽井沢と異なり、日本語が話せなければ到底生活することはできない。

野尻湖国際村

ここで野尻湖の外国人の別荘地である神山国際村（通称外人村）の成立について目を向ける。カナダ人宣教師ダニエル・ノルマンは 1931 年より軽井沢で避暑生活を始めた。しかし軽井沢は、諸開発が進み、必ずしも避暑生活にふさわしい場所ではなくなっていたと感じた。

また軽井沢は生活用水にも事欠くありさまで、もちろん外国人が総じて好む水辺レクリエーションを楽しむ「湖」も存在しなかった。言いかえれば、軽井沢での避暑生活の中で満たされなかったものは「水」であると言っても過言でない。（『野尻湖における外国人別荘地「神山国際村」の成立と展開』より）

研究書にもある水が、まさにメッツガー家の野尻湖疎開の第一理由でもあったのが頷ける。

写真の左にメッツガー家の別荘があった。
正面は妙高山（ジュニア提供）

生活

メッツガーらは別荘の点在するいわゆる「神山外人村」に暮らした。ただし父メッツガーは元町に残り、商売を続けた。もちろん時々戻ってきたが、電話もなく事前の連絡がないので、ドアが開いて突然父親がそこに立っているという状況であった。

日本の新聞も届けられた記憶はなく、1944 年のヒトラーの暗殺が未遂に終わった事件が、ひそかに伝わってきた。これは日本の新聞でも報じられている。そしてラジオもなかった。

父が鉄板を手配して別荘の中に設置してあり、それで料理ができ、暖も取れた。鉄を皆供出させられた中、特別な勘で早々と手配したのであろう。それでも暖房が切れた夜は、家の中も凍る。家族の誰もが最初に起きるのを嫌がった。暖房に火を入れないといけないからだ。

食糧はそれほど不自由したという記憶はない。パンを作るためのイーストは持っていたが、オーブンがないので、いつも蒸しパンであった。入手したコーリャンはジュニアが村のお菓子屋に持って行って飴にしてもらった。日本人が主食替わりにしたコーリャンだが、甘くておいしい飴が出来たという。

ケテルは外人村の入り口あたりの別荘を買って、夫人と二人の息子カールとヒューゴと暮らした。娘エリーゼもいた。彼女は生まれたばかりの赤ん坊を連れて、メッツガーの家を訪問した。ただしかなり後、東京大空襲の被害を受けて疎開してきた。ウォルシュケ家は外人村と住民の村の中間あたりであった。

野尻湖には水がある代わりに、他のインフラは外国人には乏しかった。1500 人くらいが暮らした軽井沢には外務省の出張所が設けられ、パン屋などもあった。ほぼ純粋な日本の田舎の暮らししかできない中、言葉が通じる日本人の妻がいるということは間違いなく利点であった。また主人が料理の腕を持つことは、これも利点だったはずだ。さらにはいろいろ詮索して回る警察もいなかった。

他の外国人

ドイツ人の 3 家族を除くと、ジュニアは他に 2 人のドイツ人が近くにいたことは覚えている。リストを見ると終戦時野尻湖（当時は信濃尻村）周辺には他に次のドイツ人がいた。おそらく最初の 2 人だが、ジュニアの記憶による住まいの場所を加える。

リウエ・ジオスナ 無職（古間に行く途中？）
ウイリー・ボルケ 無職（名前も記憶あり。村に住む）
クラウス・プリングスハイム　無職
ウイダ・シュエール　音楽家

クラウス・プリングスハイムはユダヤ人で著名な指揮者であるが、ジュニアは国際村にいたという記憶はない。本人の著書でも終戦直前に都内の修道院に軟禁されていたと書いている。また終戦直後には軽井沢に姿を見せている。よって彼ともう一人の音楽家シュエールが実際に野尻近郊にいたかは不確かな部分がある。

他に農業を営むイタリア人 1 家族、白系ロシア人が 27 名周辺にいた。白系ロシア人は地元の人の住む村に暮らしていた。彼らは“水”を求めてではなく、疎開場所を見つけるので精いっぱいであった。

また隣の古間町にも若干のドイツ人とイタリアの神学生合わせて 20 人が疎開した。施設の入手は 1945 年 4 月に入ってからのことであった。彼らが建てたのが今あるサレジオ会の野尻湖の山荘であろう。

日本人の見た外国人

次いで日本人が見た外国人の生活を取り上げる。外国人の本国引き揚げが加速したころ、NLA（Nojiri Lake Association）のメンバーたちには、たとえ帰国が決まっても、日本人に別荘を売って帰国することはやめようという申し合わせがあったという。

東京小石川教会の牧師をしていた G・E・バットは戦争が始まっても帰国しなかった。彼は 1943 年ころまで日本に残って軟禁されていたが、戦争が始まって空っぽになってしまった外人別荘を日本人が買い取るというとき、その別荘の所有権移転の書類に、立ち合いのサインをした。引き揚げた外国人は皆、バットに契約の全権を委託したようだ。

1942 年の外人村村長は日本人の古田長祥だった。この年の夏はドイツ人とかイタリア人といった同盟国の宣教師が 50 人程度避暑に来ていたのを覚えていると言う。

またこの年か翌年の夏に 20 名ほどのヒトラーユーゲントが列をなして歩いていたのを見たという証言がある。（『野尻湖国際村物語』荒川久治）

確かに日本のヒトラーユーゲントのサマーキャンプが、野尻湖で定期的に開催されていた。1943 年 8 月 28 日の読売新聞には「血盟誓う若き心」の見出しで、「日独青少年団交歓会が 27 日、長野市で行われた。ヒトラーユーゲント 25 名、ドイツ側の一行は野尻湖から午前 9 時 8 分長野駅着の列車で到着。」と書かれており、上の記述とぴったり一致する。また 1942 年の記事はないので、先の証言は 1943 年と推測される。

村の子供たちと外国人の子供たちはよく喧嘩をしたという。さらには日本人の疎開児童も加わってさらにエスカレートした。そしてどういう訳か特にハーフの子供が狙われていじめられたという。（『野尻湖国際村物語』荒川久治）

村の子供との喧嘩はジュニアに聞いたところ、記憶にないという。白系ロシア人の子供たちの話であろう。

恵まれた日本人一家

野尻湖では外国人の他に、別荘を外人から買い受けた数人の日本人が疎開という形で生活を続けていた。その数少ない住民の一人が岡野薫子の大叔父であった。大叔父岡野繁蔵はスラバヤに日本商品を扱うデパート「大信洋行」を設立、その後ジャワの各地に支店を開く成功者であった。次のような話を薫子が書いている。

1944 年元旦、繁蔵の家に母と二人で年賀の挨拶に行った。
大叔父は私の顔を見ながら、正月休みに信州にスキーに行かないかと言い出した。野尻湖畔に大叔父が別荘を持っていたこ

とを、この時初めて知った。300 戸あまりの別荘はすべて空になっていた。

その中の最も景勝地にある一戸を、繁蔵はアメリカ人の宣教師ジー・バット氏を介して買い求め、また大蔵省がその管理を依頼した東京建物から、外人別荘の委託業務を引き継いでいた。野尻別荘は、後に繁蔵の家族の疎開先となり、ますます食料の重要な供給地となった。ここでもバットの名前が登場する。また、東京建物が別荘を管理したのは軽井沢と同じだ。

1月2日
長い8時間もの汽車旅も終わり、柏原（現黒姫）の駅に着いた私達は、雪に埋まった家々を見てびっくりしました。（徒歩で）一里余りもある別荘に着きました。十数間も室数があるのに驚き、大変綺麗で、ストーブもあり、大きい“おこた”の中に足を入れてブラブラ出来た。

当時は東京から軽井沢まで約 4 時間、野尻湖まではさらに 4 時間列車に乗り続けなければならなかった。

1月3日
私達がいるこの信子さんたちの別荘は、山の上にあり、野尻湖を眼下に見下ろせます。周りには家は一軒もなく、下の方にドイツ人の別荘があります。外はものすごい吹雪です。
戦時中にスキー旅行など、正月休みとは言いながら、よく切符も手に入って出掛けられたものだと思う。

湖に面した道の右側にメッツガー家の別荘はあった。２１Ａ番。木立の中の家は外部の塗装こそ新しいが、構造は当時と同じ。右の小道が岡野家の別荘へと続く！（GoogleMap）

この下の方のドイツ人別荘とはメッツガーらのものであった。そして何とジュニアはおそらくこの時であるが、薫子ら 3 人の子供と一緒にスキーをした。一人は同い年であった。戦後も仕事を通じて会うことがあった。

終戦頃の外国人
画家・武井武雄が残した『戦中気儘画帳』には終戦直前 1945 年 6 月 21 の日付で、「野尻湖異国人印象」というイラストが描かれ、次のコメントが挿入されている。

いま湖畔別荘地帯に軟禁されている異国人、13 か国に及ぶ由。その数 5、60 人ならむか。彼等が心事果たして如何様ならむ。

と右のタイトルの横に書かれ、左側には

大風呂敷を背負い、峠を越えて農村へ（物々）交換にゆく。背に腹は代えられずとはいえ、オーバーなき冬をどうして送ることになるのか？

と同情を寄せている。イラストには鼻のとがった二人の外国人が描かれていて、一人は風呂敷を背負っている。
このイラスト上の二人の外国人はドイツ人ではなく、村に暮らした白系ロシア人あることは間違いない。白系ロシア人が日本では就ける仕事は少なく、元々行商を生業とするものが多かった。日本人を相手にする問屋で生地などを仕入れ、日本全国に行商をした。野尻湖を拠点に代えて、同様の仕事を続けたのであろう。
また外国人の人数はほぼ合致するが、13 か国に及ぶというのは、おそらく最盛期のころの話である。

横浜大空襲
1945 年 5 月 29 日、B29 爆撃機 517 機、P-51 戦闘機 101 機による横浜市中心地域に大規模な空襲が行われた。
メッツガーも元町を逃れ、僅かばかりの荷物をリアカーに乗せ、山下公園に逃げ、その日はホテル・ニューグランドに泊まった。空襲を逃れたホテルだが、多くの人が焼き出された中、被害を免れたホテルに宿泊できたというのは、日ごろのホテルとの付き合い、もしくはドイツ人ゆえのことか？
先の写真とは違う犬を飼っていた。しかしこの時は近くの憲兵隊に引き取ってもらった。この頃まで犬を飼えたのもドイツ人ゆえの特権であった。日本人は飼い犬をすべて軍に供出しなければならなかった。こうして父メッツガーも野尻湖に合流する。

1943 年 9 月に山手など一帯は港湾施設が見えるということで外国人の「絶対居住禁止区域」に指定され、全員が軽井沢、箱根などに疎開したのだが、指定地域にならなかった山下町では以降もメッツガー、先のジャーマン・ベーカリーのように、外国人が終戦近くまで経済活動していたことを、筆者は改めて認識した。
終戦の玉音放送は、野尻湖の別荘にはラジオがなかったので、メッツガー家は他の家に行って聞いた。

戦後
野尻湖は戦後すぐに米兵のリゾート地となった。長野に駐屯する部隊の兵隊が、休暇に訪れた。10 歳そこそこのメッツガーがヨットの操縦方法を米兵に教えた。戦時中、かつての別荘の持ち主のヨットが湖畔にいく隻も係留されていた。ジュニアは適当に選んではセーリングを楽しんでいた。

敗戦の年、すぐさま父は横浜に戻った。しかし混乱の中、店は再開できなかった。そして港に停泊する貨物船でコックを務めた。その後、山手の先の旭台の米軍施設でキッチンマネージャーとして働く。旭台の邸宅には、時期はずれるが、来日直後のマッカーサーも数日滞在している。
母も 2 人の娘を連れまもなく野尻湖を去る。長男、次男も相次ぎ離れ、ジュニアとあと一人、子供二人でもう一冬残った。

晩年の母（ジュニア提供）

1947 年秋にジュニアも戻る。
ドイツ系の学校は一つもなかったので、翌年、山手のインターナショナルスクール、セント・ジョセフに通う。授業は英語であった。野尻で米兵と話した程度の英語力のジュニアは、クラスを落としての入学となる。おかげでその後はドイツ語より、英語の方が話しやすくなる。最初は逗子に住み、そこから混雑する横須賀線、当時の京浜東北線の終点桜木町まで行き、さらに市電に乗り換え元町で降り、坂を上って学校に通った。次の住まいは鎌倉であった。結婚して鎌倉の家を出たのが 26 歳の時である。

1953 年に撮影されたセント・ジョセフの校門での写真

終わりに
筆者がジュニアにはじめてお目にかかったのは、本文でも述べた 2019 年 11 月の根岸の外人墓地での墓前祭であった。その時の写真をお送りしたことが縁で、お会いしてこうした話をまとめ上げることができた。貴重な当時の資料も提供いただいた。ここに心から感謝をしたい。最後にジュニアが野尻湖について語ってくれた次の言葉で締めくくる。

我々特に男の子たちは、野尻湖で冬はスキーを、夏はセーリングとボートを学び、楽しんだ。春には雪が解け、新芽が吹き、秋にはいろいろな種類のキノコを摘んだ。そして豊野と牟礼にリンゴを買いに出かけた。

※写真は断りのない限り筆者が撮影。

関連記事
「論文『野尻湖における外国人別荘地「神山国際村」の成立と展開』
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jitr/3/1-2/3_KJ00009976839/_article/-char/ja/
「森利子さんの体験した戦中の横浜・山手」
http://www.saturn.dti.ne.jp/~ohori/sub-mori.html
「心の糧（戦時下の軽井沢）」
http://www.saturn.dti.ne.jp/~ohori/sub-karuizawa1.htm

大堀　聰（おおほりそう）
第二次世界大戦中に欧州に暮らした日本人、日本に暮らした外国人の足跡をたどることをライフワークとして、自らのホームページ「日瑞関係のページ」上に公開している。　www.saturn.dti.ne.jp/~ohori/
横浜日独協会理事

ドイツ経済の動き 第63回
ウイルスとの戦い

伊崎 捷治（当協会理事　元ベルリン独日協会副会長　当協会ドイツ時事問題研究会世話人）

➢➢➢ 科学的知見に基づく感染防止を優先

ドイツで防疫の基本となるのは「感染防止法」と防疫の実施体制を定めた「パンデミック（行動）計画」です。その中核に置かれているのはメルケル首相でも政府の危機対策本部でもありません。国立の感染症研究・基準機関であるロベルト・コッホ研究所（RKI）です。RKI は感染防止法に基づいて、強い独立性のもとで国内外に整備された関係機関のネットワークを通じて感染症の発生や伝播を日ごろから綿密に監視し、国内の関係機関に迅速かつ適切な情報提供を行っていく役割を担っています。今回のコロナ・パンデミックに際しても、国民の 60 ～ 70% が感染することも想定して、少なくとも感染の山が医療サービスの能力を超えないことを目標に、科学的・医学的見地から医療機関として必要な備え、患者の診察から検査、自宅隔離などのステップに関する指針を含め、社会や医療システムにかかわる極めて広範な情報や勧告を国内各地の関係当局や医療機関に向けて発信し続けています。

➢➢➢ 実行は地方の機関

感染の現場から RKI に情報を送り、RKI の助言を受けて行動する主体は 16 ある連邦州、中でも地方自治体の保健・防疫担当部局ないしは各地の保健所です。それぞれが地域の状況に照らして必要な措置を見極め、医療機関や法律専門家などと連携しつつ態勢を整え、実行していく役割を担っています。

たとえば、地方の保健所が感染防止法に基づいて村の住民全体に自宅隔離を命じることもあります。それは基本法に定められた自由の一部を制限する例のひとつですが､感染防止法ではとることのできる措置は特定されておらず､単に「感染防止に必要最小限」の措置とあるのみです。しかも､一般市民や一定の業種を対象とする「接触禁止」や「休業命令」などの各措置は強い強制力を持っていて、補償がないばかりか、違反者には重い罰金が課されることがあります。

しかし、大規模な催しの中止など、地域の保健所の手にあまるような場合は州政府が乗り出すことになります。州は各市町村の措置を調整したり、州としての統一的な措置を講じたりすることができ、今回の主な対策も重要なものは基本的に州レベルで定めたものでした。このため、州によってばらつきが出ることもありました。

こうして、地域をベースに、状況に合わせてさまざまな角度から効果的な措置が検討されますから、その過程で優れた措置が生まれてくることもあります。そうした状況を南ドイツ新聞は「連邦制のドイツにはパニックに陥ったり、慌てたりして、国中の学校を一斉に休校にするような中央政府は存在しない」と解説しています。

➢➢➢ 連邦政府の役割

このように、連邦制のドイツでは医療体制や医療の実施は基本的に州の役割であり、感染防止のどのように大きな措置も州の境界を超えることがありません。

それだけに、重大な局面では 16 州の間の調整を通じて国全体で一致して事にあたる体制を整えるという点で連邦政府は重要な役割を担っています。国民に向けたメルケル首相の訴えも広く共感を得ました。3 月 12 日の第 1 回連邦・州対策会議では集中治療用ベッドの増床（新設および開放）と連邦による費用負担などの方針が示された後、同 16 日の第 2 回では、クラブ・バー、博物館などの休業、同 22 日の会議では国民全体を対象とする接触禁止、飲食店の休業など広範で次々と厳しい規制が合意されました。いずれも実施主体は各州です。そして、規制が導入された第 2 回からちょうど 1 か月後の 4 月 15 日には各種規制の一部が緩和されることになりました。日本で緊急事態宣言の対象が 7 都道府県から全国に拡大されたのはその翌日でした。

なお、今回は旅行者の移動に伴う感染の抑制、医薬品や試験機器、身体防護装備品、医療用資材の調達など国レベルの規制する権限が連邦保健大臣に付与されました。しかし、その権限も連邦議会および連邦参議院の双方が「国難といえるパンデミック」が発生したと認定した時から終息したと認定した時までと、注意深く制限されています。非常事態宣言が濫用されて、民主主義から大きく道を外した歴史への反省はこんなところにも反映されています。

➢➢➢ 事業と雇用の継続が重点の経済対策

感染防止法には国民経済への言及は見当たりません。経済大臣や労働大臣も連邦危機対策本部の蚊帳の外です。

しかし、パンデミックが大きくなれば、防疫のための規制の有無にかかわらず、経済全体にも当然大きな影響が及び、対策が必要になってきます。そうした認識に立って、経済面の対策も RKI の情報を参考にして早くから検討が始まり、3 月 10 日には労働時間短縮手当の条件改善が決定されました。失業保険会計を利用するものですが、事業と雇用の継続が主眼で、補正予算の成立に先駆けて決定されました。その 2 日後には病院に向けて集中治療用を含む病床の増設や人員強化を含む病院の患者受け入れ能力の拡充を補助する方針が示されました。

補正予算は 3 月 23 日の閣議決定後 4 日というスピードで議会を通過しました。総額は 1,225 億ユーロ（約 15 兆円）で、そのうち約 500 億ユーロが自営業者やフリーランサーの支援に充てられます。日本では、該当すれば誰でもすぐに何十万円もの資金を受け取ることができるかのように伝えられましたが、あくまでも事業継続のためのつなぎ資金であり、生活保障ではありません。後になって申請違反がわかり、罰則を受けた例は少なくありません。フリーランサーは被雇用者であれば労働時間短縮手当の対象になりますが、事業主ではなく、身一つの人は対象になりません。代わりに失業手当 II（生活保護）の申請が勧められています。他にも低所得者の支援などいくつかあり、その結果、国民の大半が支援の対象になり、枠外になるのは公務員および年金生活者くらいかと思われます。学生は奨学金の条件緩和がありますが、難しいところかもしれません。

補正予算ではこのほか、集中治療用病床を 1 床増設するごとに 5 万ユーロ、手術の延期などによる空きベッドの用意 1 床 1 日あたり 560 ユーロの補助が行われます。これは病院に早くから知らされていたこともあって、受け入れキャパシティが拡大しました。集中治療用病床や ECMO の空き状況を地域別、病院別に示すインターネット掲示板も完成し、誰でも参照できるようになっています。こうした対策もあって、これまで病床不足が懸念されるような事態は全く起こっていません。むしろ、病床は集中治療用を含めて十分な余裕が保たれ、周辺国から 200 人もの重症患者が受け入れられ、現在は一般の患者用に開放されるようになっています。経済支援策はその後拡充されており、補正予算の範囲内で収まるかどうかは不明ですが、注目される点のひとつは、税収減を織り込んだ 2020 年の 1,560 億ユーロの赤字には毎年 5% ずつ、20 年で返済する計画が添えられていることです。

➢➢➢ 日本は何を参考にできるか？

COVID-19 によるパンデミックはまだまだ終息が見込まれず、波が繰り返されたり、新たなウイルスが発生したりしないとも限りません。日本とドイツでは条件が異なる面もあり、防疫面の成果を直接比較することはできません。

しかし、日本で最初の感染者が発見されたのはドイツよりも 10 日早かったのに、日本で全国に向けた非常事態宣言が発せられた時にはドイツではすでに規制の緩和が始まっていたというのは事実です。OECD のデータによると日本の人口あたりの病床数はドイツの 1.5 倍ですが、ドイツでは日本のような医療崩壊の懸念は起きませんでした。ホテルの利用など、日本の方が優れている点もあろうと思います

そうした中で、わたくしは自分の生活や命がいかに政府の行動にかかっているか、今回ほど強く実感したことはありません。

改めてドイツの状況を観察していると、いくつかのことに思いあたります。

1．過去の経験をいかに生かすか：ドイツで現在の感染予防法が成立した背景には、かつて経験した HIV 血液製剤による感染の拡大があったといわれます。こうしたことを二度と繰り返すことのないよう、連邦議会が超党派の調査委員会を設けて、不可避とみられる人権への介入をいかにして最小限にとどめ、成果を挙げることができるか、長期間にわたって根底から検討した結果だといわれます。それ以外の面でも歴史の教訓を未来に生かすそうとする意志が強く働いています。

2．安心できる健全財政、質の高い雇用の維持、国民重視の経済政策、事務手続簡素化政策など、日ごろの地道な努力こそが危機にあたって最大の力を発揮すること。今回の経済対策についても財政大臣は健全財政あってこそと強調しています。

3．独立した専門機関の知見が政策に生かされる：ドイツでは感染予防法における RKI の役割がそうですが、経済運営についても経済諮問委員会や主要経済研究所の鑑定などを政策に反映する方法が定着しています。政府機関であっても政府から独立した中立の機関の客観性という裏付けが国民の側で信頼感を高めているのだろうと思います。しかし、政府から独立しているかどうかは当該機関側の問題ではなく、政府の側次第です。

（2020 年 5 月 4 日記）

Die Kulturkiste
＝文化の玉手箱＝

映画紹介

お名前はアドルフ?

田中 麻優（日独協会会員）

『お名前はアドルフ？』という映画は、ある夫婦の妻側の弟夫婦に新しく生まれてくる子どもを、第二次世界大戦とホロコーストを指揮したあのヒトラーと同じアドルフと名付けることについてディスカッションしていく物語です。私は初めてこのタイトルを聞いた時、お堅い内容の映画だと思いましたが、ディスカッションの話題は子どもの名付けから家族の秘密に移り、その途中で笑いもあるので、身構えずに見られる映画になっています。その一方で、アドルフと名付けることについてのディスカッションのシーンも十分見ごたえがあり、その議論は、アドルフと名付けることに反対している私の根拠が揺らぐほどの説得力を持っており、アドルフという名付けについて熟考したい方にも大変おすすめです。

出演している俳優陣の中で特に有名なのは、クリストフ＝マリア・ヘルプストで、彼は大ヒットドイツ映画『帰ってきたヒトラー』にも出演していました。ドイツで知らない人はいないくらいに有名なので、彼の演技にも注目していただきたいです。彼のキャラクターがとてもいい味を出していますし、ドイツ人と彼について話題にしてもいいかもしれません。

この映画はヨーロッパで大ヒットした舞台がもとになっているため、撮影場所は基本的に部屋の中でこじんまりとしています。しかしそれがかえって私たちの想像力をかき立て、物語の中に入り込みやすくさせているのが特徴になっています。そして舞台では出せない映画ならではの良さは撮影方法にも表れています。例えば、みんなでディスカッションをしている場面では、カメラが巡回していくカメラワークが用いられています。それにより一人からの目線・視点にとらわれずに、物事を様々な視点から考えることができる点は特に工夫されていると思います。日本人はディスカッションする習慣がないとよく言われていますが、この時ばかりは様々な視点から彼らのディスカッションに参加せざるを得ないほど興味深くスピーディーな展開となっています。

この映画は吹替ではなくドイツ語音声と日本語字幕となっており、話の内容もさほど難しくないため、ドイツ語の勉強にももってこいです。この映画のもとになった舞台はフランス人演出家によって描かれたものですが、映画化する際にドイツ人監督、脚本家、出演者らによってドイツ風にオリジナル脚本が作り上げられました。その点に気を付けて観てみると、ディスカッション好きと言われるドイツ人の性格やドイツの文化を垣間見るチャンスにもなると思います。

映画の最後には、現代の問題についてメッセージがあり、私たちが人生をより豊かなものにするためにそれぞれがどうすべきなのか、考えさせられます。ぜひ大切な方々と見ていただきたいと思います。

『お名前はアドルフ？』
6 月 6 日㈯よりシネスイッチ銀座ほか全国順次公開
© 2018 Constantin Film Produktion GmbH
監督：ゼーンケ・ヴォルトマン
出演：フロリアン・ダーヴィト・フィッツ、クリストフ＝マリア・ヘルプスト、ユストゥス・フォン・ドホナーニ、カロリーネ・ペータースほか
原題：DER VORNAME ／ 2018 ／ドイツ／ドイツ語／ 91 分／
日本語字幕：吉川美奈子
配給：セテラ・インターナショナル

第一回

今年2020年はドイツが生んだ偉大な音楽家ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの生誕250周年にあたります。そこで本シリーズでは数回にわたって、ベートーヴェンを様々な角度から見つめなおしていきたいと思います。第一回目となる今回は、ベートーヴェンの生きた時代とその生涯を取り上げます。

ベートーヴェンとその時代

平野　昭（元慶應義塾大学教授・音楽学）

1：ベートーヴェンと同世代の人々

今年2020年、音楽家ベートーヴェンが生誕250年を迎える。音楽史で見れば、1685年に生まれた二人の巨匠のひとりゼバスティアン・バッハが1750年に、そして、もうひとりのフリードリヒ・ヘンデルが1759年に他界し、バロック様式からクラシック（古典）様式へと移行する過渡期が18世紀半ばにあった。バッハ他界の年にJ. ハイドン（1732～1809）はすでに18歳、そして、W. A. モーツァルト（1756～91）も「7年戦争」の始まる年に生まれている。古典派様式を象徴すると同時にその代表的な新ジャンルとしての交響曲と弦楽四重奏曲、そして、ピアノ・ソナタの基盤がこの偉大な作曲家二人によって築き上げられ、洗練された音楽作品として広まりはじめたころ、1770年12月にケルン選帝侯の居城の町ボンにルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、同名の祖父をボン宮廷楽長、父ヨーハンを宮廷テノール歌手とする家に生まれた、というような書き出しでベートーヴェンの生涯をこの短文で語ることは諦めなければならない。ここでは文化史的な観点からベートーヴェンの生きた時代を見てみよう。

ベートーヴェン生家（ボン）
写真：石原悠大

今年生誕250年を迎えるのはベートーヴェンだけではない。芸術学や美学で現在でも必修の弁証法美学のヘーゲル（1770～1831）、そして、彼とチュービンゲン大学での同窓生である詩人のヘルダーリン（1770～1843）もユビレウムの年にあたっている。また、同大学同窓ということでは下級生に観念論哲学のシェリング（1775～1854）もいる。この1770年前後に生まれた哲学者、思想家、文学者には18世紀末から19世紀の諸芸術に大きな影響を及ぼす哲人たちが少なくない。例えば、イエナ大学で教授シラー（1759～1805）の同人であったシュレーゲル兄弟の兄ヴィルヘルム（1767～1845）と弟フリードリヒ（1772～1829）による『シェイクスピア作品集』のドイツ語翻訳（1797～1810）は多くの音楽家たちに大きな関心を抱かせた。例えば、ベートーヴェンの広く親しまれるピアノ・ソナタ第17番の愛称《テンペスト》、オペラの題材として一時期構想をねっていた『マクベス』、その中の合唱曲〈魔女たちの合唱〉のスケッチが残されている。そして、このスケッチとの関連の可能性からピアノ三重奏曲第5番には《幽霊》の愛称が付けられている。また、生涯にわたる親友のヴァイオリニストのシュパンツィヒを、その肥満体形から「ファルスタッフ」のあだ名で呼ぶなどシェイクスピアとの関連を窺がわせるものが少なくない。フランス語やラテン語、イタリア語を解したベートーヴェンだが、英語が苦手で、ロンドンとの交渉ではいつも代筆を頼んでいたことからすれば、ベートーヴェンのシェイクスピア作品への関心はドイツ語翻訳版を通してのものであっただろう。

こうした文学作品や哲学書等々とベートーヴェンに関する研究はまだまだ未開拓のままなのだ。ベートーヴェンの没後半年ほどで行われた遺品公開と競売のために準備された財産目録と競売目録にそうした書籍があるかないかの問題ではない。ベートーヴェンの知識の源泉はいくつもあったのだ。ウィーン時代のベートーヴェンの主要なパトロンであったヴァン・スヴィーテン男爵（1733～1803）やオーストリア大公ヨハン・ヨーゼフ・ライナー・ルドルフ（1788～1831）、そして、ラズモフスキー伯爵（後に侯爵1752～1836）らの邸宅には膨大な蔵書と音楽作品の所蔵を誇る図書館があり、ベートーヴェンは折に触れて、それらを自由に閲覧することができたのである。

2：ボン大学とフランス革命

18世紀後半の古典派時代を代表する世界的な作曲家J. ハイドン（1732～1809）とW. A. モーツァルト（1756～91）とベートーヴェンとの決定的かつ本質的な違いは、先人二人の音楽が王侯貴族中心の音楽界のためのものであったことにある。また、彼らは大きな社会変動や政治思想、文芸思潮等々にほとんど無関心であったことだ。一方、ベートーヴェンはボンの宮廷楽士時代18歳の年、1789年5月から領主ケルン選帝侯マックス・フランツ（1756～1801）の命により、宮廷に隣接したボン大学に在籍し、哲学とギリシャ古典学と文学を学んでいるのである。とりわけオイロギウス・シュナイダー（1756～94）教授の講ずるギリシャ文学は多くの学生を集める人気科目でベートーヴェンも受講していた。そして、ファン・デル・シューレン（生没年不詳）教授やヨハネス・ネープ（生没年不詳）教授の講ずる現代哲学とタデウス・デレーザー（1757～1827）教授の新約聖書解釈とギリシャ語講座もベートーヴェンは受講していた。この時期でもっとも注目されるのは、1789年7月14日にパリで民衆が蜂起しフランス革命が勃発したというニュースがボンに届いた時、大学でシュナイダー教授による特別講演が開かれたことだ。この革命の原動力となった「自由・平等・博愛」をスローガンに掲げる共和主義精神を熱く説くシュナイダー教授に学生たちは熱狂的な共感を示し感動して聴き入った。この時期にベートーヴェンが生涯にわたって自由主義と共和主義を信奉することになる原点がある。大学外でも宮廷近くの書店兼レストラン「ツェア・ガルテン」を拠点とする「ボン読書協会 Lesegesellschaft」ではボン大学の教授たちや学生だけでなく、ボンの教養人たちが集い、早くから若い詩人ゲーテ（1749～1832）やシラー（1759～1805）などの詩作や小説、戯曲の読書会やディベートが行われていた。ベートーヴェンは正規会員ではなかったがボン大学学生時代には日常的に参加しており、この時期の中心的な話題はカント（1724～1804）であった。合理論と経験論を融合した批判哲学で注目されていたカントの『美と崇高の感情に

関する考察』や『純粋理性批判』『実践理性批判』等についての談論風発が「ツェア・ガルテン」の賑わいとなっていた。

ボン大学は、宮廷を中心とした文化活動、とくにオペラと演劇を推奨し、さらに J. J. ルソー（1712 ～ 78）、クロプシュトック（1724 ～ 1803）、カント、ヘルダー、ゲーテ、シラーの文学作品を普及させることに尽力し、ラインラントの啓蒙主義を推進する政策をとっていた前選帝侯マキシミリアン・フリードリヒ（1708 ～ 84）が 1777 年に宮廷の一部に開設したアカデミーを母胎としている。前選帝侯の逝去に伴い 1784 年に就任した新選帝侯マックス・フランツは、フランツ一世とマリア・テレジアの末子であり、ウィーン育ちで、ウィーンに君臨する神聖ローマ皇帝ヨーゼフ二世（1741 ～ 90）の末弟であった。モーツァルトを擁護した兄に劣らずモーツァルト（奇しくも同い年）音楽の賛美者で、ボンの宮廷楽団に多くのモーツァルト作品をもたらした。マックス・フランツは 1785 年にアカデミー講師としてドイツ各地から優れた科学者、哲学者、思想家たちを招聘し、同時に宮廷図書館をアカデミー付属図書館として充実を図り、政治経済を扱うさまざまな新聞コレクションにも力を注ぎ、1786 年夏にアカデミーを発展的に解消してボン大学を設立したのである。

３：ヨーゼフ・カンタータとレオポルト・カンタータ、そして、ウィーン進出

1790 年 2 月 20 日に皇帝ヨーゼフⅡ世逝去。皇帝の実弟マックス・フランツが統治するボンにこの報せが届くと、読書協会が中心となってボンでの皇帝追悼式を企画し、追悼カンタータの作曲を 19 歳のベートーヴェンが担当することになり《皇帝ヨーゼフⅡ世を悼むカンタータ》が書かれている。また、同年 10 月にヨーゼフの後継として実弟レオポルトの戴冠式がフランクフルトで行われ、皇帝レオポルトⅡとしてウィーンに入場する。この時もボンでベートーヴェンが《皇帝レオポルトⅡ世の即位を祝うカンタータ》を作曲している。ベートーヴェンにとっては初めての大がかりな独唱と合唱を伴うオーケストラ作品であった。

1792 年 7 月初旬、1 年半のイギリス滞在を終えてウィーンへの帰途にあったハイドンは、皇帝の実弟である選帝侯を表敬するためボンに立ち寄り、ボン宮廷楽団の演奏で歓迎されている。このときベートーヴェンの作曲したカンタータを見て、選帝侯にベートーヴェンのウィーン留学を進言したのである。すでにモーツァルトは前年 12 月に他界していたが、選帝侯はいずれボンの宮廷楽長になるであろうベートーヴェンをウィーンのハイドンの許で作曲修行させることを許可したのである。

４：ピアニストから作曲家へ

モーツァルトが他界して 1 年のウィーンに進出したベートーヴェンは K. リヒノウスキー侯爵の持ち家に住みながらハイドンの許で作曲学習を積む一方で、傑出したピアニストとして音楽愛好貴族界の寵児となってゆく。リヒノウスキー侯邸サロンでのコンサートの主役としてウィーンの多くの音楽家たちと親交をむすんでゆく。1796 年には 2 月から 7 月初旬までのおよそ半年間に及ぶプラハ、ドレスデン、ライプツィヒそしてベルリンへの演奏旅行に出ている。ドレスデンではザクセン選帝侯の夜会に招かれ御前演奏を披露し、また、ベルリンではプロイセン国王ヴィルヘルムⅡ世の御前で新作のチェロ・ソナタ 2 曲を国王の宮廷楽団首席奏者のジャン・ルイ・デュポールのチェロとの二重奏で演奏し、作品献呈に対し、ルイドール金貨の詰まった金製嗅ぎ煙草入れを下賜された。

1790 年代は自ら演奏に参加するピアノを含む多くの室内楽や協奏曲の作曲をしていたが、ウィーンの音楽界からの期待に応えて 1800 年に交響曲第 1 番、1801 年にはバレエ音楽《プロメテウスの創造物》を発表して音楽活動の中心を創作へとシフトしていった。1805 年までには交響曲第 3 番《エロイカ》も唯一のオペラ《フィデリオ》（第 1 稿《レオノーレ》）まで作曲している。

５：ブレンターノ家の人々とゲーテとベートーヴェンの出会い、そして、「不滅の恋人」への手紙

ウィーンは 1805 年と 09 年の 2 度にわたってナポレオン率いるフランス軍に占領されている。この間に、しかし、ベートーヴェンは《運命》や《田園》交響曲やヴァイオリン協奏曲などの傑作を書き上げ、その名声はヨーロッパに広く知られるようなっていた。フランス軍占領下で王侯貴族の多くが疎開していた 1809 年に名誉宮廷顧問官であった名士ヨハン・フォン・ヴィルケンシュトックが病床に臥すと、フランクフルトに嫁いでいた娘アントーニエ（1780 ～ 1869）が夫フランツ・ブレンターノ（1765 ～ 1844）と子供たちと共に見舞いのために帰郷するのだが、看病の甲斐なく秋に他界している。アントーニエ一家は亡父の膨大なコレクションや遺産整理のため 1812 年 6 月まで滞在することになる。このころ一家とベートーヴェンとの親交が始まっている。

1810 年にフランツの異母妹であるベッティーナ・ブレンターノ（1785 ～ 1859）が異母兄一家をウィーンに訪れ、ベートーヴェンとの親交をむすんでいる。ベッティーナと兄クレメンス・ブレンターノ（1778 ～ 1842）の母は若い時代のゲーテの恋人の一人として知られるマキシミリアーネ（旧姓）・フォン・ラ・ロッシュ（1756 ～ 93）である。ベッティーナは 7 歳の時に母を亡くし、小説家としても知られた祖母ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュ（1731 ～ 1807）の許で育てられるのだが、ここで若い時代のゲーテが祖母に宛てた 43 通の手紙を見つけ出し、その内容が亡き母マクセ（マキシミリアーネ）への愛の告白であったことを知り、すでに有名になっていたゲーテへの親近感を抱いていた。その後 21 歳の時にベッティーナはフランクフルトに住むゲーテ実母を訪問し、親交を結び、熱狂的なゲーテ信奉者となっていたのである。この後、ベッティーナはゲーテ本人と会いたいという気持ちを抑えきることができず、1807 年にワイマールのゲーテを訪問することにし、若い時代の祖母ゾフィーの婚約者であったこともある作家のヴィーラント（1733 ～ 1813）に紹介状を書いてもらったのである。祖母の古き友でワイマールの宮廷顧問官をしていたヴィーラントの紹介ということで、ベッティーナはゲーテに会うことができたのである。

さて、ウィーンを訪れたベッティーナは 4 月ころにゲーテに宛て「私は、現在ウィーンの故ヴィルケンシュトック邸に逗留しています。二千枚の銅版画が私を取り囲み、同じ数の絵画、数百の陶磁器や古い壺・・・数えきれない地図に囲まれています・・・」と記し、5 月 28 日にもゲーテにベートーヴェンとの親交について報告すると同時にゲーテの悲劇『エグモント』が間もなくベートーヴェンの音楽付きでウィーンで上演されることなどを伝えている。この年の 8 月 10 日と 11 日の 2 日間にわたってベッティーナはボヘミアのカールスバート（現チェコのカルロヴィ・ヴァリ）とテープリッツ（現テプリーチェ）でゲーテと共に過ごしている。ここでベッティーナからウィーンのベートーヴェン情報がゲーテに多くもたらされたと思われる。ベートーヴェンから歌曲や劇音楽《エグモント》の献呈を受けていたゲーテもベートーヴェンとの交流を望むようになっていた。

自らも小説家であったベッティーナは 1811 年 3 月に兄クレメンスの親友でドイツ民謡詩集『少年の魔法の角笛』の共同編纂者として知られる詩人アヒム・フォン・アルニム（1781 ～ 1831）と結婚し、ワイマールでゲーテの祝福を受けている。

こうして 1812 年 7 月から 9 月までボヘミア、テープリッツ滞在中にベートーヴェンとゲーテとの邂逅が実現したのであ

る。ウィーンを出発する直前６月までにベートーヴェンは交響曲第７番を概ね完成させ、夏のボヘミアでは交響曲第８番の作曲を進めながら、ゲーテと二人きりでの散歩や芸術談義を楽しんだのである。7月19日からの５日間にわたって毎日テープリッツや近郊のピリンまでゲーテと二人で散歩をしながら親交を深めていた。また、９月７日から数日カールスバートでもゲーテと再会を楽しんでいる。

一方、この「7月６日朝」「月曜日夕方７月６日」そして「すばらしき７月７日朝」の日付をもつ３通の熱烈な恋文が1812年に書かれたものであることが分かっている。宛名不明の手紙の１通目は「私の天使、私のすべて、私の私 Mein Engel, mein alles, mein ich」の呼びかけ、２通目は「きみは悩んでいる、私の最も大切な人よ Du leidest du mein theuerstes Wesen」、そして３通目は「もうベッドの中から思いは君に、私の不滅の恋人へと馳せている　schon im Bette drängen sich die Ideen zu dir meine Unsterbliche Geliebte」である。

ベートーヴェンの死後にその机の引き出しから見つかったこの恋文の相手探しは、ここではさておくとしよう。この手紙はおそらく投函されなかったのだろう。知的教養の高い多くの女性に恋をし失恋したベートーヴェンの、その時々の恋心に嘘はなく、いつも本気で真剣に愛していたのだろう。ただ残念なことにどの恋も成就しなかったのだ。

６：ウィーン会議とウィーン体制の晩年

当時のヨーロッパを震撼させていた一連のナポレオン戦争も1812年のモスクワ侵攻の大敗でナポレオン軍の勢力は衰えを見せ始めていた。翌1813年イベリア半島に侵攻していたナポレオン軍が６月21日にスペインのヴィトリア近郊でウェリントン将軍率いるイギリス軍に大敗したという報せがウィーンにも届き、ウェリントンの勝利に市民は歓喜した。このころメトロノームの考案者でベートーヴェンの補聴器なども作っていた機械技師のヨハン・ネポムク・メルツェル（1772～1832）はベートーヴェンにイギリス旅行の話を持ち掛け、その手土産として、ウェリントン将軍の勝利を讃える音楽の作曲を依頼してきたのだ。本来はメルツェル発明の大がかりな自動演奏装置パンハルモニコンのためのものであったが、９月に作曲に着手し、《ウェリントンの勝利》の曲名で12月８日と12日にウィーン大学講堂で行われた「ハーナウ戦役傷病兵救済チャリティー演奏会」において交響曲第７番とともに初演されたのである。2回の演奏会の収益は必要経費を除いて4000フローリンという高額に達し、全額が国境守備隊の傷病兵救済基金に寄付された。12月20日付けの『ウィーン新聞』は交響曲第７番と《ウェリントンの勝利、あるいはヴィットリアの戦闘》の演奏会は「満場の喝采は高まり、陶酔にまで達した」と称賛を伝えている。

オペラ《フィデリオ》の最終改訂稿による上演が大成功をもたらした1814年はベートーヴェンの名声をさらに決定的にする「ウィーン会議」が開催された年だ。皇帝フランツ一世が主宰する会議が９月１日からシェーンブルン宮殿を会場として開催された。オーストリア外相兼宰相メッテルニヒ（1773～1859）が会議の進行役となり、フランス首相兼外相タレーラン（1754～1838）の主張する正統主義に沿って、ヨーロッパの秩序をナポレオン戦争前の旧体制（アンシャンレジーム）に戻す方向で会議が重ねられた。しかし、各国がそれぞれ利害を主張し、さまざまな駆け引きもあって会議は1815年６月９日の「ウィーン議定書」締結まで９か月の長期に及んだのである。まさに「会議は踊る、されど進まず」であった。

９月下旬になると会議に列席する各国王侯や元首がぞくぞくとウィーンに結集し、同盟国君主列席のもと26日に宮廷劇場で歓迎音楽界が開催され、ベートーヴェンの《フィデリオ》が上演された。ヨーロッパ各国から訪れた高官や文化人たちの期待のひとつはベートーヴェンの音楽を聴くこと、ベートーヴェンに出会うことでもあった。多くの人々からの称賛を耳にしながら、ベートーヴェンは10月から11月半ばにかけて、ウィーン会議を賛美する最大の音楽となる大カンタータ《栄光の瞬間》を作曲したのである。このきわめて愛国的なカンタータの歌詞は王室顧問官でザルツブルク聖ヨハネ病院外科医長で詩人としても知られたアロイス・バイセンバッハ（1766～1821）が書き上げた頌詩であった。この作品はオラトリオ風の構成で、ウィーンの女神ヴィエンナ、女預言者、民衆の指導者、守護神という４人の独唱者と合唱（混声、女声、男声、児童）が会議に列席した主要国元首を讃えるものだ。「雲の腰掛に足を置く英雄」でロシア皇帝アレクサンドル一世を、「シュプレー川の堤に佇む支配者」でプロイセン国王フルードリヒ・ヴィルヘルム三世を、「遠きペルト海峡の王」でデンマーク・ノルウェー国王フリードリヒ六世を、「力と善意の象徴であるヴィッテルスバッハ家の王」でバイエルン国王マキシミリアン一世を、そして、最後に「冠を戴く者」でハプスブルク家オーストリア皇帝フランツ一世を「バーベンベルクの力をふるい、ドイツに楽園を築く」と締めくくる女神ヴィエンナのレチタティーヴォが象徴的だ。

ヨーゼフ・シュティーラーによる肖像画『ミサ・ソレムニスを作曲中のベートーヴェン』（1820年）

1818年に古今のピアノ・ソナタの最高傑作とされる《ハンマークラヴィーア・ソナタ》を作曲してから1826年11月の最後の作品となる弦楽四重奏曲第16番までの10数曲はどれもが音楽史上の傑作とされる作品ばかりだ。最後の３曲のピアノ・ソナタ、《ディアベッリ変奏曲》そして、唯一の作曲の弟子であるルドルフ大公のオルミュッツ大司教就任を祝う《ミサ・ソレムニス》とシラーの頌詩『歓喜に寄す』から抜粋したテキストによる合唱を伴う交響曲第９番、最後の５曲の弦楽四重奏曲がすべてである。「心より出で、願わくば、再び人の心に至らんことを」との言葉を献辞に添えた《ミサ・ソレムニス》と同じニ長調の響で作曲されている《第九》フィナーレ楽章で使われた歌詞「Alle Menschen werden Brüder　すべての人々が兄弟となる」と「Seid umschlungen, Millionen ！抱きあえよ、諸人よ」そして「Diesen Kuss der ganzen Welt！　この口づけを全世界に与えよ」という言葉の強調にはベートーヴェンがボン時代に感化された共和主義精神の表明がうかがえないだろうか。

1827年３月23日、ボン時代からの親友シュテファン・ブロイニング（1774～1827）と秘書 A. シンドラー（1795～1864）に身体を支えてもらいながらベッドで「遺書」を書き、二人に「喝采せよ、友よ、喜劇は終わった、プラウディーテ・アミーチ、コンメディア・フィニータ・エスト」と古典ローマ喜劇の決め台詞を精一杯ユーモアをこめて語った、と伝えられているが、真偽はあきらかではない。その３日後、26日に、最後の住居となったシュヴァルツシュパニアーハウス（黒いスペイン館）の庭には春の名残雪、時ならぬ稲妻が走り春雷の轟きわたる夕方、ベートーヴェンは二日間の昏睡から奇跡的によみがえったかのように両目を見開き、右手拳を振り上げながら一点を見つめ、手を下すと同時に永眠、17時45分。56年と３か月の生涯であった。

シリーズ
私とドイツ File12

「私とドイツ」は日独協会の会員、関係者にご自身とドイツ・日独協会との関りについて語っていただくシリーズです。会員の皆様からの投稿をお待ちしています。

パンは日独交流の窓だった

佐藤 由木子

日本とドイツを自由に行き来できるようになるまで、あとどれくらいの月日を要するのか。この原稿を書いている 4 月現在、想像すら難しい状況のなかで、心のなかにドイツを思い浮かべることがこんなに切ないことだったとは、思ってもいませんでした。今は世界中で程度こそ違え、苦しい思いで過ごしている方ばかりだと思うのですが、この文章を手に取っていただける頃には、少し希望の灯が見え始めていることを期待し、気持ちを奮い立たせて、私とドイツの 27 年間を振り返ってみたいと思います。

創業当時。右から創業者と筆者。

ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、タンネという日本橋浜町の小さな店は、父が 1993 年に開業しました。以来ずっとドイツパンを専門に焼いています。当時、弊社は輸出用の梱包を主な生業にしており、何度目かの客先訪問でドイツを訪れた父がとくに南ドイツの粉もの文化にすっかり魅せられてしまったのが、そもそものきっかけでした。生意気盛りのうえ、そもそも家業の手伝いに気が進まずにいた私でしたが、とにかく一度ドイツへという父の策略？にまんまと引っかかり、以来ドイツの食に胃袋をつかまれたまま、あっという間に 27 年間が過ぎました。

現在勤務中のマイスター

さて、ドイツパンとは何なのか。あるマイスターはこれを称して "Backparadies" と言いました。いわゆる食事パン（大型の）を指す Brot だけで数百種類、小型パンや菓子パン・クッキー・ケーキとなると 2,000 種ともいわれる種類の豊富さは、まさにパラダイスという言葉がふさわしいです。ふんわり甘い、サクサクして香ばしい、甘酸っぱさと香ばしさのバランス、フレッシュな乳製品のコクを生かし、木の実がぎっしり、もっちり食感はバターにぴったり、ありとあらゆる嗜好を満たせるヴァリエーションが用意されています。さらにアレンジをいかようにも展開できる、そのための理論と技術とツールが揃っています。タンネをはじめて間もない頃は、ドイツという風土に対するイメージ（思い込み）と、この伸びやかで自由自在な世界とにギャップを覚え、自分のなかでなかなかドイツの像をひとつに結べずにいました。胃袋をつかまれたとはいえ、江戸ッ子の私が東京日本橋で何故ドイツパンを生業とするのか。本場の味に拘れば拘るほど、自分が何者で何処にいるのか、分からなくなるような居心地の悪さを感じたのも正直なところです。

創業メンバーである筆者母を囲みドイツでの集い

それが今、COVID-19 感染拡大と闘う規制の多い日々にあっても、当たり前のようにドイツパンを焼き続けようと思うようになったのは何故か。そこにはこれまでの数多い出会いと、そこから学んださまざまなことが私のなかでムクムク育ち、大事な「核」になってきたからだと思います。言葉も通じない見知らぬ異国に単身でやってきて、毎日毎日丁寧にパンを焼き、私たちを指導してくれたマイスターは 20 人にもなります。初代のマイスターは、パンを生まれたての赤ちゃん、貴女はそれを落としたんだよ、とうっかり手からパンを滑らせた私を叱りました。日に何百と焼いても、その一つ一つが大事な赤ちゃんなのだそうです。そうっと大切に大切に扱ってくれ、と彼がその太い指で優しくパン生地を扱う様子を 27 年経った今も忘れることはありません。食べ物への敬意は日本の食にも存分に払われました。どんなものも慈しんで口に運んでくれ、それを通して日本人の世界を理解しようと努めてくれました。反対に私が彼らの故郷や家族を訪問すると、もうこれ以上は無理というほどたくさんのご馳走を用意して、家族の行事や地域の慣習を見せてくれました。こうした交流の積み重ねが今の私の血となり肉となったことは疑う余地がありません。

開業当時、およそ 2,000 人のドイツ人が東京横浜エリアで暮らしていたそうです。中には日本でドイツパンを食べられるとは思っていなかったと半信半疑だった方々も、実際に口に運ぶと納得してくださり、その後はとても熱心に店を応援してくださいました。大量のパンをお届けに行くと家の中まで招き入れてくださり、キッチンやご家庭のことをいろいろ教えてくれました。ある日、長い出張を終えたので急ぎパンを届けてというご注文を受け、珍しく朝のうちにご自宅へ伺った時のことです。Guten Morgen!! と元気良く挨拶すると、まだまだ！まだパン食べていないから bad morning なんだ、とウィンクして仰います。ゆっくり話したいけれど早く食べたいから今日はごめん、と落ち着かぬ様子に驚きもし微笑ましくも思いました。日本駐在を終えてドイツへ帰国されたのちも交流を続けているご家族がたくさんあります。

ドイツパンの店タンネ
住所：東京都中央区日本橋浜町 2-1-5
水天宮前・人形町・浜町の各駅から徒歩 5 分
電話：03-3667-0426
https://www.facebook.com/doitsupantanne/

この頃、新しい出会いは幾世代も下の若い方たちが増えています。一昨年から輸入を開始したミュンヘン郊外のチーズメーカーは、スタッフだけでなく、企業としての取り組み方も先進的でとても勉強になります。後発だからこその拘りとオリジナリティ豊かなチーズを、タンネでは販売だけでなく調理パンにも活用しお客様に喜んでいただいています。私の下手なドイツ語に耳を傾け、遠い日本の顧客に思いやりと敬意をはらう彼らの姿勢に、頭が下がりっぱなしです。彼らと熱いハグを交わせるようになる日がとても待ち遠しい。

まとまりのない文章になりましたが、離れていても心を通わせられる「人」や「縁」を得たことを、あらためて感謝する機会になりました。どうも有難うございます。

プロフィール：当協会会員。1991 年より家業を手伝って、ドイツパン専門店開業に参画。'14 年から経営を引き継ぎ、地域に根ざした店舗への成長を期して、2 階をユニークなスペース TANNERAUM にこの春改装。年に 2,3 回の渡独では、友人たちとの交流だけでなく、美術館訪問、移動中の読書を楽しんでいます。もちろん食べ歩きも…。

ドイツ語が繋ぐ道
―ドイツ修士留学とその後 ―

田口季京

日本では新年度に入ってから２か月が経ち、新しい環境にも徐々に馴染み始めた頃でしょうか。かくいう私も、昨年度で７年間に及んだ学生生活に終止符を打ち、一足早くベルリンでの新生活を始めました。今日は長い学生生活を送ることになった理由とその後の生活について、綴ってみたいと思います。

転換点としての交換留学

学生生活が７年に及んだのは、学士の４年間に加え、修士課程に３年間在籍していたためです。結果的に交換留学と修士留学を併せ、３年の月日をドイツで過ごすという、数年前には想像すらしていなかった展開となりました。

交換留学時代を過ごしたボン大学

交換留学は大学間の協定であることもあり、初めての海外生活でも挑戦しやすい機会なのではないでしょうか。出発前の私も、大学生活のうちの１年間をドイツで過ごすだけで、卒業後は「普通に」日本で就職しようと当然のように考えていました。しかし、初めて長期間日本を離れた先で柔軟な考えを持つ多くの友人との出会いに恵まれ、自分自身や日本について考える時間が増えた結果、自分の「常識」を追う以外の選択肢もあるかもしれないと漠然と考えるようになりました。「この先何をやりたいか分からない」とこぼす私に、「何をやりたくないかが分かればそれで充分」「ドイツで修士はどう？」という言葉をかけてくれ、自分が「今興味を持てること」を追うきっかけをくれた友人には、今でも感謝しています。

奨学金のすゝめ

ドイツでの進学という選択肢が現実味を帯びたのは、交換留学から帰国した後、DAAD（ドイツ学術交流会）による修士号取得のための奨学金を知ってからです。第二外国語での留学だったこともあり、交換留学期間はドイツ語の習得に大半の時間を奪われ、本当に学びたかったことにまで辿り着けなかったという後悔は、もっと勉強してみたいという思いに変わり、興味分野を経済的な負担なく学ぶには、ドイツでの修士が最適だという結論に至りました。DAADからは交換留学前にも２ヶ月間の語学コースのための奨学金をいただいていたのですが、２年間の修士向けプログラムがあることに気が付いたときには、締め切りまで２週間を切っていました。直前に快く推薦書を執筆してくださった指導教授のおかげで、何とか10月末締め切りの書類を提出することができ、面接を経て合格通知をいただいたのは１月が終わる頃でした。ドイツは教育費が安く、DAADをはじめとする奨学金もあるので、これから留学を考えるみなさんには前向きに、ただし早めに情報を集めることをお勧めします（笑）。

進学先については、奨学金に応募した時点で調べてはいたのですが、実際に出願手続きを行ったのは奨学生となることが決まってからでした。ドイツにおける過去との取り組みに興味を持っていた私にとって、政治学と歴史学の両方を学ぶことのできるイェーナ大学の学科はとても魅力的で、インターネット上でその存在を知ったときに「ここだ！」と思い、結局１校しか出願しませんでした。簡単な自己紹介と研究関心、DAAD奨学生である旨を添えて研究科長に直接メールを送った結果、その教授のもとで研究を進めている教員の方から温かいお返事をいただき、その後の出願センターでの手続きも６月頭ごろまでに問題なく終えることができました。学生街としても有名なイェーナでは、毎学期大量の留学生を受け入れているため、寮の手配などもスムーズに進み、自分でやったことといえば住居課への登録手続きくらいだったと記憶しています。

イェーナでの学び

指導教授の勧めで日本でも進学を選択したため、東京で１学期を過ごしたのちにイェーナに到着したのですが、そこでの生活は、各授業で課される課題文献の購読やプレゼンの準備に追われる毎日でした。ドイツで修士号を取得するには、学位論文以外にも比較的多くの単位が必要で、特に１学期目は朝から夜まで授業がある日も珍しくありませんでした。また、主に授業のない学期間休みにレポートを執筆することになるため、休み中に図書館で過ごす日も多く、一度に４本の期末課題（総ページ数70以上！）を抱えて泣きそうになったこともありました（笑）。実際、学科同期のうち４学期で修了したのは、奨学金や日本の院との関係で在籍期間が限られていた私だけだったので、留学生が２年間で全課程を終えるには多くのエネルギーが必要になると思います。しかし、大変ではあったものの、レポートのテーマや文献に関して時間を惜しまず相談に乗ってくれる教授陣に恵まれ、多くを学ぶことができました。２年間で履修した授業のテーマは、各国の歴史政策や共産主義体制下のイェーナにおける学生抵抗運動、東ドイツにおけるユダヤ文化、外交政策と学問的提言、記念碑文化など多岐にわたり、授業形態も講義やゼミだけでなく、強制収容所の訪問を含む集中講座やベルリンでの宿泊ゼミ、他研究機関との提携など、実にさまざまでした。ドイツにいなければ触れることのできなかったであろう分野も多く、心底勉強が楽しいと思えた日々でもありました。

イェーナ大学のメイン校舎

たかが２年間、されど２年間

とはいっても、２年間勉強ばかりしていたわけではなく、空き時間に日本語を学びたいネイティブの友人とタンデムをしたり、ホームパーティーに呼んでもらったり、大学のオーケストラに所属してデンマークへの遠征旅行や１週間に及ぶオペラ公演に参加したりもしました。また、最後の半年間はずっと経験してみたかったインターンに挑戦するべく、いくつかの研究所や教育センターにメールを送った結果、主に東欧における独裁を扱う研究所から快い返事をいただき、修論執筆の傍ら週２日のインターンを経験することもできました。日々のプレスチェックだけでなく、高校生のための研究プロジェクトコンテストやデイセミナー、国際シンポジウムの企画・運営、種々の歴史記念日に際した記念式典など、大学の授業だけでは知り得なかった側面を見ることができたのは、現地に身を置いていたからこそだったと思います。

イェーナで所属していたオーケストラのオペラ公演練習

最終関門となった修論では、テーマが定まらない苦難の数か月間を経た後、ドイツにおける「過去との取り組み」の文脈を踏まえたうえで、90年代の日本における「過去の克服」に焦点を当てることになりました（日本の修論では80年代西ドイツの「歴史政策」を扱いました）。出来はともかくとして、多くの方に助けていただいたおかげで、それまで学んできたことの集大成を論文として何とか形にすることができ、諦めずに取り組んでよかったと思っています。イェーナでの日々は、興味の赴くままに多くのことを経験できた貴重な２年間でした。

インターン先の財団が運営している歴史記念館

次なる分かれ道

大学院修了後の進路を真剣に考え始めたのは、イェーナでの最終学期を控えた３月でした。在外公館での専門調査員は、応募資格に修士号が含まれていることもあって選択肢のうちの一

つではありましたが、直前にならないと募集ポストが分からないため、ドイツ語を使って国際貿易や国際交流に関わる仕事がしたいとだけ漠然と考えていました。在ドイツ大使館で内政を扱う専門調査員が募集されていることを知ったのは4月初めで、それから1か月ほどは、決して安いとは言えない帰国費用を選考試験のためだけに費やすかどうか、期限付きのポストに応募するメリットはあるだろうかなどとかなり頭を悩ませましたが、多くの方に相談に乗ってもらった結果、これまで興味を持って学んできたことを生かしつつ新たに多くのことを学べるだけでなく、この機会を逃せばもう経験できない仕事だと思い、応募を決めました。日本での修論執筆を終えた2月末が赴任時期であったことも、応募を後押しした一つの要因だったと思います。

選考は語学試験・適性検査・論文の一次試験と、二次試験の面接（外国語会話含む）によって行われました。一次試験受験にあたっては申し込みをするだけで、ほとんどの書類は一次試験の合否が分かってからの提出だったので、時間的コストをかけることなく一次試験に臨めた点も大きかったと思います。私が応募したのは春募集だったため、正式に派遣が決定したのは7月末ごろでした。

現在はベルリンの大使館で、現地の報道や世論調査のチェック、大使のアポイントメントへの同行などを通したドイツ内政の報告・分析を担当しています。修士号を持っていること、3年以上担当ポストの分野に関わっていることが応募条件だったとはいえ、ドイツの専門家が揃う職場で自らの勉強不足を痛感する毎日ですが、わずかばかりの専門性を尊重してくれる方々とともに、ドイツ語を使ってドイツ政治を勉強できる貴重な環境に身を置いています。また、学術の世界とはまた違う実務の世界で、面白いと思えることに仕事を通じて向き合える点にも充実感を感じています。

「今興味を持てること」を大切に

現在滞在しているベルリンの大聖堂

これまで修士留学や専門調査員への応募など、進路に関してはかなり悩みましたが、現在も任期付きのポストのため、これからもキャリア選択の悩みからは逃れることはできないと思います。それでも、納得できないまま「普通」の就活をするのではなく、「この先何をやりたいか分からない」を考え続けるのでもなく、「今興味を持てること」を選んだことに後悔はありませんし、だからこそ得られた出会いや開けた道も多くあります。今となっては、せっかく何かをやりたいと思えたのならその気持ちを大切に、前向きに調べ、相談し、叶えられそうな道を模索するのも、分かれ道に立った時のひとつの処方箋なのかもしれないと考えるようになりました。これまで新たな一歩を踏み出すのを躊躇するたびに、私の背中を押してくれた方々には感謝しかありませんし、私の体験がみなさんにとっても何かを考えるきっかけになれば、それ以上嬉しいことはありません。

たぐちききょう：ボン大学への交換留学を経て慶應義塾大学法学部政治学科卒業、DAAD 留学奨学生として Friedrich-Schiller-Universität Jena, M.A. Politik und Geschichte des 20. Jahrhunderts **及び慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修了。現在在ドイツ日本国大使館専門調査員。**
連絡先：sid.mskn4@gmail.com / kikyo.taguchi-2@mofa.go.jp

Die Kulturkiste
＝文化の玉手箱＝

映画紹介②

コリーニ事件

菊池 菜穂子

自分が「良く知っている」と思っている人物でも実際知っている部分は氷山の一角にすぎない。人には家族にも親友にも言わず墓場に持っていく「真実」が山のようにあるんじゃないか、なんてことを考えているときに、映画『コリーニ事件』を見た。

映画の舞台は2001年ベルリン。物語は85歳の大物実業家ハンス・マイヤーが、ファブリツィオ・コリーニに殺害される場面からはじまる。コリーニはドイツで30年以上まじめに働いてきたイタリア国籍の初老の男だ。新米弁護士カスパー・ライネンが国選弁護人を引き受けるが、コリーニは黙秘を続け、殺人の動機やマイヤーとの接点は謎につつまれたまま取調べは一向に進展しない。しかし、コリーニが使った凶器が「ワルサー P38」であったことから、事態は一気に動き始める。コリーニとマイヤーの過去が明かされていき、それは図らずも、忘れ去られた歴史の闇につながっていく。歴史に詳しい人であればこの「ワルサー P38」と聞いただけで何かピンとくるかもしれない。諦めきった眼差しで黙秘を続ける犯人、というだけで充分好奇心をくすぐられるが、そこに、マイヤーを父親代わりのようにして育った弁護士ライネンが恩人の殺害者を弁護することの葛藤や、処世を知りつくした初老の辣腕弁護士と情熱に燃えた新米弁護士の対決、といった登場人物たちの様々なファクターが織り込まれていく。

原作は『犯罪』、『罪悪』、『テロ』などのベストセラー小説を次々と生み出しているフェルディナント・フォン・シーラッハの同名小説。シーラッハは現役の刑事事件弁護士であり、自身が扱った数多くの事件からエッセンスを抜き出し虚構と織り交ぜ、法で裁ききれない「真実」を小説の形で描きだして、読者に「罪とは何か？」を問い続けてきた。

映画では、遺族側の辣腕弁護士マッティンガーが「君が見つけた真実など誰の役にも立たない」という言葉を新米弁護士ライネンに投げつけるシーンがある。そして、それと対比するかのように物語の後半、コリーニが「欲しいのは正義だけだ」「どんな法律が奴の見方をしたんだ？」と訴えるシーンが印象的だ。コリーニが求めた「正義」を握りつぶしていたのは、過去に一部の人間たちに都合よく作られた悪法だったわけだが、正義を封じ込める法改正とそれを許す社会というのは過去だけの話ではないだろう。ちなみに、ドイツでは原作の小説がきっかけとなり、2012年に連邦法務省が省内に調査委員会を立ち上げたそうだ。役に立つか立たないか、利益を生むかどうかが優先される世の中からこぼれ落ちた物を拾うのは小説の役割だが、この小説はこぼれ落ちた「真実」を扱って逆に世の中を動かしてみせた。

コリーニがイタリア人であること、そして映画では弁護士ライネンがトルコ系の人物として設定されていることから、ドイツの影の一面も知ることができる。このライネンを演じるのは、2000年代初頭の人気TVドラマ「Türkisch für Anfänger（初心者のためのトルコ語）」や、大ヒット映画「Fack ju Göhte（くたばれゲーテ！）」に出演した人気俳優エリヤス・ムバレク。やんちゃな役のイメージが強いが、本作では一転、硬派な新米弁護士を演じている。原作とは設定が若干変えられているが、映画ならではのスピード感で一気に物語に引き込まれる。ぜひ映画館でお楽しみください。

『コリーニ事件』
2020年6月12日㈮より新宿武蔵野館、YEBISU GARDEN CINEMA ほか全国公開
© 2019 Constantin Film Produktion GmbH
配給：クロックワークス

シリーズ
ドイツの鉄道

その14：ドイツ鉄道と遅延、その関係について　②

久保 健（鉄道史学会会員　日独協会会員）

ドイツ鉄道（Deutsche Bahn AG ,DB）の長距離列車を中心に、遅延する理由を考えるシリーズの２回目です。前回は６分以上遅れた場合に遅延列車として記録されるドイツ鉄道の定義、現状は7割ほどの定時運行率であること、そして１時間以上遅れた場合、運賃の一部を受け取れる返金システムがあることを紹介しました。今回はいよいよ、遅延する原因をドイツ鉄道のダイヤ設定の特徴から考えていきたく思います。なお時刻や列車設定などは2019年12月15日から2020年12月12日までのドイツ鉄道のダイヤを参照にしています。

ネットワークダイヤは便利な反面、遅延発生時は弱点にもなります。

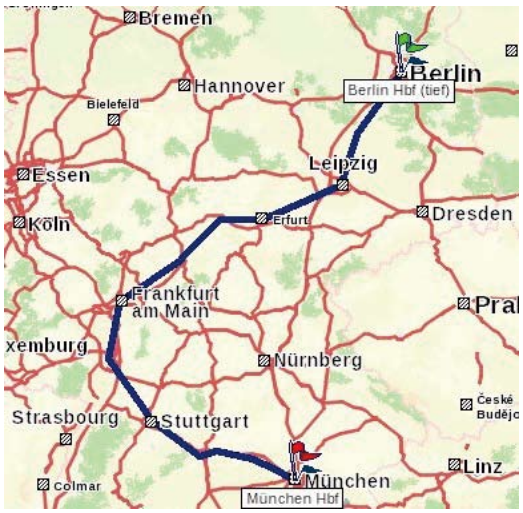
■遅延に弱いネットワークダイヤ

ドイツ鉄道のダイヤ設定で感心するのは、ネットワークダイヤの充実ぶりです。１時間ごとや２時間ごとといったパターンダイヤを採用し、主要駅では違う方面同士の列車と同じホームに到着し、数分の待ち時間で、階段を使わない、対面乗り換えができるよう配慮されています。ICEに乗り、乗換駅に到着すると、向かい側のホームに別方面へ向かうICEが待っており、互いに乗り換え客が慌ただしく乗降するホームの様子を思い出す方も多いのではないでしょうか。この緻密に作り上げられたネットワークダイヤは、19世紀末まで統一国家ではなく、小国や王国などが分立していた流れをくみ、現在も大企業が地方で多く見られる、地域分散化が顕著なドイツの都市事情を反映し、多くの中都市間の輸送もカバーしなくてはならない、ドイツ鉄道の特徴と言えるでしょう。ただこのネットワークダイヤも、一度噛み合わなくなると脆いもので、接続列車が遅れている場合は到着待ちになってしまいます。もちろん、いつでも遅延列車を待っているのではなく、個人的な経験ですが、最終列車など特別な事情が無いかぎり、10分以上の遅れの場合は、接続列車を待つことなく、見切り発車しているようです。乗っている列車が十数分ほどの遅れで、接続時間が数分の場合、待っていてくれるかもと淡い期待も持ちつつ、車内放送で「乗り換えの列車は接続しません」と、きっぱりと言われた時の驚き、落胆、やっぱり感。いずれかに心当たりのある方もいらっしゃるのではないでしょうか。

ドイツネットワークダイヤの主力ICE。

■長距離列車が遅延を拡散

このドイツ鉄道の長距離列車ネットワークの主力は、なんと言っても高速列車ICEです。現行ダイヤでは、国際列車も含め13系統に大別され、網の目のようにドイツ中に運行区間が設定をされています。日本の新幹線のように、大都市間を始発駅から終点まで、最短距離で結ぶ系統もあれば、路線バスのように、様々な役割や利用区間を継ぎ足し、遠回りをしながら結ぶICEもあります。このような遠回りICEの極めつけは、ベルリン中央駅からミュンヘン中央駅の最短距離600km強ほどを、ほぼ1.6倍の970ｋｍほどで結ぶ系統でしょう。下の写真に載せたように、ベルリンを出るとライプツィヒ中央駅、エアフルト中央駅を通り、ここから南下してミュンヘンを目指すのではなく、西のフランクフルト・アム・マイン中央駅を経由し、そこから方向を変え、シュトゥットガルト中央駅、そしてミュンヘン中央駅まで、青線で見られるよう、くの字を描くようなルートを、日中２時間ごと、８時間かけて結んでいます。中都市間の利用を考え、途中駅間での乗降を前提とした長距離列車の設定は、別方面へ向かうICEやIC（Inter City）といった優等列車の接続も、先の経由にあげた主要駅はじめ、多く設定されています。１本の列車の遅れは、各駅の接続列車へ遅延を拡散させる恐れがあり、接続列車の多い長距離列車の遅れは、影響の範囲も広がりやすいことは明らかでしょう。ネットワークダイヤは、ドイツ鉄道が誇るべき素晴らしいサービスですが、長距離列車が多く運行されている状況も見ますと、他列車を遅延に巻き込みやすいダイヤ設定と言えるのかもしれません。



青線がベルリンからミュンヘンまでの経路になります。

長距離列車の遅延に、ドイツ鉄道も手をこまねいているのではなく、発車10秒前に閉まることになっていた長距離列車のドアを、2016年10月17日から、発車時間の30秒前に閉め、時間どおりに発車できるよう工夫しています。ただ４年経て見返してみると、利用者がすばやく乗車するようになったとも思えず、遅延率もさほど改善されていないようで、再考の余地はあるようです。またドイツ鉄道全般に言えることですが、ICEからローカル列車まで、並行して走る自動車を易々と追い越すようなフルスピードで定時運転をしているように見受けられます。遅延をすると、もともとが高速走行で設定されたダイヤのため、さらに速度を上げての定時回復運転は難しいようにも感じていますが、どうでしょうか。

さて、毎度のお願いになり申し訳ありませんが、ドイツの鉄道について、ご興味を持たれている点など、ご要望などいただけますと嬉しく思います。お手紙なら日独協会の「ドイツの鉄道宛」、メールでは（jdg@jdg.or.jp）まで、皆様のご一報、お待ちしております。

モヤっとドイツ

―ミュンヘンでの生活をつうじて ―

その 7：日独でのコロナ差別の「モヤっと」と「スッキリ」

柳原 伸洋

■ 2020 年 5 月

2020 年 5 月時点、ドイツも日本も新型コロナウイルス（COVID-19）のニュースであふれています…。実はこれ、前号と似たようなタイトルと出だしなのですが、この方が問題を重ね合わせて考えられるでしょう。ぜひ、前号の記事と併せてお読みください※1。

今回は本連載の最後ですので、もともと「帰国後のモヤっと」について書く予定でした。たまたま「ファイナル・モヤっと」が、COVID-19 を軸にした連続の読み物になってしまいました…。ただ、連載を締めくくるには、不幸にして最適の状況が到来してしまいました。「全人類の生活自体」がモヤっとしたからです。

つまり、ウイルスの非境界性・越境性と、「モヤっと」の曖昧さは親和的なのです。もちろん、皆さんが強制的な「モヤっと状況」に放り込まれ、何を考え、いかに行動するかが迫られてしまい、ストレスフルな生活をされていることでしょう。私も例外ではありません。

一年ぶりの研究室。現在は遠隔講義の講義室に。

ここで、2020 年 5 月時点で本連載全体から強調したい点は、「モヤっと」の対立概念である「スッキリ」が暴力まで帯びて危険なものになりうるということでしょう。

■スッキリも悪くないと言ってしまう「ファイナル・モヤっと」

肩透かしかもしれませんが、スッキリも悪いわけではありません。「我慢上等」の社会では、緊張が高まり、いつかぷっつりと糸が切れるか、あるいは暴発してしまいます。ここでは、スッキリを向ける矛先が問題です。前回で書いたように他者を差別し、貶めるなどの方向に向かうと危険なわけです。この点に関しては、過去の「歴史の失敗」に学ぶことができるでしょう。そして、このスッキリをコントロールするのは、各個人というよりも、前号で扱った「お墨付き」だと思うのです。以下、前号からの引用です。

今回のコロナ禍で「個々人は弱い」という事実が突きつけられました。またそれは、ドイツでも日本でも同じです。「個人は弱い」ので、様々な集団や団体が差別反対の「お墨付き」を与えることで、自身の差別・被差別が参照できる点が生まれるのです。

■自粛要請という「お墨付き」のない地獄

弱い私たちは、「モヤっと」を解消するために、自他をスッキリと分けようとしたい欲望が湧き出ています。たとえば、3 月後半に日本帰国とあいなった私ですが、さっそく「自粛要請」の洗礼を受けてしまいました。このことは、「毎日新聞デジタル」のインタビュー記事でお話をしました※2。「要請に従わないなど不謹慎だ」という言辞は対象が違えども、この二ヶ月間、日本におられたなら、どこかで見聞されたと思います。とくに 3 月後半以降は、欧州からの「帰国者・帰国学生」叩きが喧しかったわけです。

その後に、このスッキリを求める他人叩きは対象を変えて、現在もまだ進行中です。しかし「どうしても」従えない人がいることへの想像力は、ウイルス拡大および経済状況の悪化とともに他人事ではなくなりつつあります。

■メルケル首相の演説

ドイツでは日本に比べれば、強制的な措置が採られていました。私の家族は依然としてドイツ生活をしていますので、色々な現地の状況を聞き知りました。とくにミュンヒェンでは、3 月末から 4 月前半にかけては警察の取り締まりが強かった模様です。

このようなドイツの強制的な措置を持ち上げるつもりはありません。とにもかくにも、人権を傷つけるものであることは事実なのです。また逆に、2020 年 5 月中旬時点の日本の「要請」を頭ごなしに難じるつもりもありません。なぜなら死者数が抑制されている点はやはり良いことだからです。しかし、「要請」が他者への攻撃とセットになってしまう可能性を認める必要があると思っています。

また、日本でも有名になった 3 月 18 日のメルケル演説は、他国の首相演説としては、日本でもっとも読まれたものでしょう。この演説が、人々をスッキリとさせるものではなかった点を指摘しておきたいです。「説明を尽くす」という演説の出だしからして、ややこしそうです。あれこそ、ある種のスッキリとした強制措置を強いる問題性を指摘し、私たちの心の中に「モヤっと」を息づかせる演説だったのです。逆に、「モヤっとした現実のありのまま」を語ることで説得性が増していたともいえます。

こうした制約は、渡航や移動の自由が苦難の末に勝ち取られた権利であるという経験をしてきた私のような人間にとり、絶対的な必要性がなければ正当化し得ないものなのです。民主主義においては、決して安易に決めてはならず、決めるのであればあくまでも一時的なものにとどめるべきです。しかし今は、命を救うためには避けられないことなのです。

ドイツ連邦共和国大使館・領事館のサイトより※3

■「モヤっと」はスッキリと終わることはない

最後に。この連載をつうじて自分自身も「思考の幅」が拡がりました。それはひとえに、みなさんと「モヤっと」について考え続けてきたからだと思います。ふたたびメルケル演説を引用しましょう。

我が国は民主主義国家です。私たちの活力の源は強制ではなく、知識の共有と参加です。

今後も、みなさんに向けて「モヤっと」した知を共有していきたいと思います。ちなみに、7 回の連載を終えた今の気持ちは「スッキリ」です！　Danke schön!

※1：日独協会のサイトで公開されています。http://www.jdg.or.jp/info/service/magazine_j.html

※2：「『要請』なのに罰則？　ドイツから帰国した研究者が日本の『水際対策』に感じた違和感」『毎日新聞デジタル』（2020 年 4 月 5 日）https://mainichi.jp/articles/20200404/k00/00m/040/003000c

※3：https://japan.diplo.de/ja-ja/themen/politik/-/2331262

著者プロフィール：やなぎはら・のぶひろ。京都府生まれ。東京女子大学・歴史文化専攻准教授。専門は、ドイツと日本の空襲研究。ペンネーム・伸井太一では日独協会のイベント等に出演。著書に『創作者のためのドイツ語ネーミング辞典』（ホビージャパン）など。

学校では教えてくれない **ドイツ語** *Vol.2*

学校では教わらない、教科書には載らないドイツ語。
第二弾は、「東ドイツの言葉」前編！

河内 秀子

前回はベルリン訛りについて書かせて頂きました！しかし「ベルリン」といっても、ベルリンの壁が崩壊するまで 40 年間、東と西という 2 つの国に分かれていたのだから、言葉も違うのでは？という疑問が生まれてきました。

数少ない生粋のベルリン子の友人たち曰く「ベルリン訛りに関しては東西の違いはない」とのこと。とはいえ国が違ったので、商品名や料理の名前などは違うものも。今年は、東西ドイツが再統一してから 30 年。消えていく言葉もあれば、変わるものもあるでしょう。今回は、「なくなった国」東ドイツ（Deutsche Demokratische Republik ドイツ民主共和国　略称 DDR）の言葉をテーマに、お送りします！

Plaste（東）/Kunststoff（西）「人工樹脂・プラスチック」

ベルリンに来たばかりの頃、蚤の市で DDR デザインの雑貨やオモチャを買い集めていました。その際によく耳にしたのが「プラステ」という言葉。日本語の「プラスチック」に似た言葉だったので、何を指しているかはすぐわかりましたが、標準ドイツ語では「クンストシュトッフ」と言います。西側の「クンストシュトッフ」に比べて「プラステ」は、手触りがざらっとして違う触感だと思いこんでいたのですが、最近、東ドイツの有名な広告スローガン「シュコパウのプラステとエラステ」で知られる、プラスチック製造の工場の一部が、なんと西ドイツからの 13 億マルクの支援金を得て作られたもので、この工場で作られていた PVC の 8 割が西側に輸出されていたという話を聞きました。

写真はプラステ製のベルリンのお土産品です。

Kosmonaut（東）/Astronaut（西）「宇宙飛行士」

映画「グッバイ、レーニン！」で、ダニエル・ブリュール演じる主人公アレックスが、西側に亡命し、はなればなれになっていた父の子どもたちと一緒に、いまも現役の東ドイツ発の子ども番組「ザントメンヒェン」を見るシーンがあります。

「今日は、ザントメンヒェンはアストロノート（宇宙飛行士）になった！」と声を上げる女の子に、アレックスは「僕の出身地では、コスモナウトと言うんだよ」と言います。どこから来たの？という問いに、「僕は違う国から来たんだ」と答える彼の姿が、印象的でした。

ドイツ初の宇宙飛行士
ジークムント・イェーン（1978）
(Bundesarchiv, Bild 183-T0709-148 / Peter Koard / CC-BY-SA / CC BY-SA 3.0 DE)

ちなみに“ドイツ”人初の宇宙飛行士は、東ドイツ出身のジークムント・イェーン（Sigmund Jähn）。1978 年、ソ連が打ち上げた有人宇宙飛行船「ソユーズ 31 号」に搭乗しました。東ドイツの子どもたちの憧れの存在だった彼は、昨年、82 歳で亡くなり、「ドイツ中の」人に惜しまれました。

Motschekiebchen（東）/Marienkäfer（西）「てんとう虫」

東ベルリン出身の知人に、「東ドイツでしか使わない言葉ってある？」と聞いた時に出てきた言葉です。モッチェキープヒェンという語感が可愛らしい。元々はザクセン地方の言葉だそう。ドイツ語正書法辞典「DUDEN」にも載っていたので、案外メジャーな言葉なのかもしれません。

Kaufhalle（東）/Supermarkt（西）「スーパーマーケット」

たまに、スーパーマーケットのことを「カウフハレ」と言う人に遭遇します。DDR で、食品・雑貨、化粧品などを売る日用雑貨店だった「カウフハレ」。ごく稀に「コンズム」と言う人もいますが、こちらは生活協同組合が経営する食品店のチェーンでした。いまもドレスデンやライプツィヒなどいくつかの旧東ドイツ側の都市には「コンズム」という名前のスーパーが存在しています。東と西ドイツに限らず、スーパーやコンビニ、ファミリーレストランやファーストフードといった身近にあるものほど地域色がでるものですね。

Dederon（東）Perlon / Nylon（西）「ナイロン」

デデロンは東ドイツで開発された、DDR を代表する合成繊維！名前からして、DDR（デーデーアール）＋ナイロン＝デデロン。ベルリンに来たばかりの夏、古着屋で花柄のデデロン製シャツを買いました。ふわっと透けてて涼しそう〜と思って買ったのに、これが死ぬほど暑い！ベトベト！全然汗を吸わないんです。先日、ピオニール（旧東独の少年団。ボーイスカウト及びガールスカウト的なもの）の青いシャツや赤いスカーフがデデロン製だと知ったのですが、やはり「夏場は汗で体に張りついて、嫌だった」そうです。

Niethose（東）/Jeans（西）「ジーンズ」

東ドイツには「代用ドイツ語」とでも呼びたくなるような、「敵性語の言い換え（?）」言葉が存在しました。現在はあまり耳にしません。その一つが、この「ニートホーゼ」です。1960 年代、アメリカのファッションを代表するような存在「ジーンズ」をなんとかドイツ語で言えないかとひねり出された、この言葉。「ニート」とはドイツ語でリベット（鋲）のこと。ジーンズのポケット部分の隅には、ステッチ部分の補強とデザイン性を高める目的で金属製のリベット（鋲）が付いていることからこの名前になりました。ニートホーゼを身にまとい、もじゃもじゃと髭と髪を伸ばしていた若者は、警察や秘密警察から目をつけられ、「ニートホーゼ着用の人は、入場禁止」なんて書いてあるクラブもあったそう。

また「ベトナム人の契約労働者がジーンズを縫ってくれて」という話もよく聞きます。人によっては、西側のジーンズ素材を入手して凝ったものを縫ってくれたのだとか。「西側に親戚がいる人は、リーバイスとか送ってもらって、自慢げに履いていたな」という声も。 ストーンウォッシュやケミカルウォッシュっぽくなるように、自宅で何度も洗った、なんて話は、どこの国でも同じなんだなあと、微笑ましく聞きました。

Lipsi（東）/Rock'n'Roll（西）「ロックンロール」

こちらも「代用ドイツ語」。ロックンロール！？なんてアメリカ的な！この人気が広まるのを止めなければ！というわけで、東ドイツではロックンロールのような、「リプシー」という独自の大衆向けのダンススタイルが作りあげられました。1958 年にライプツィヒで華々しくお披露目されたそうですが、あまり人気は続かなかった模様です。

Schallplattenunterhalter（東）/DJ（西）「ディスクジョッキー（DJ）」

そして今回の、横綱級「代用東ドイツ語」はこちら！ドイツ語らしい（?）長い単語です。

DJ、ディスクジョッキーをドイツ語で言うならば、というわけでひねり出されたのが「シャルプラッテン（レコード盤）ウンターハルター（エンターテイナー）」！

国家試験を受けて「シャルプラッテンウンターハルター」のライセンスをもらった人だけが“ディスコテークイベント”で音楽をかけることができたそうです。東ドイツ国家のお墨付きのレコード盤エンターテイナー、いまもまだこの肩書きで仕事をされている方もいるよう。彼らのイベントに一度足を運んでみたいものです。

Geflügelte Jahresendfigur（東）/Weihnachtsengel（西）
「クリスマスの天使」

ドイツで有名なものの一つに、クリスマスマーケットがあります。

旧東ドイツ地区の中でもドレスデンは、ドイツ最古のクリスマスマーケットが開催され、シュトレン祭りがあったりと毎年とても盛り上がるのですが、DDR 時代はどうだったのでしょうか。

ご存知のとおりクリスマスはキリスト教のお祭り。信教の自由を認めつつも、党の存在が宗教よりも優先されなければいけない東ドイツ政府のもとでは、クリスマスは祝いつつもキリスト教に通じるものはできるだけ避けなければいけない、というジレンマがあったそうです。例えば、クリスマス飾りとしてポピュラーな「エンゲル（天使）」。天使はキリスト教的だから……というわけで、販売店がひねり出した苦肉の策が「ゲフリューゲルテ・ヤーレスエントフィギュア（羽の生えた年末の像）」。なんじゃそりゃ？！確かに年末ではありますが。

ただし、商品のパッケージなどではこの言葉が見つかるものの、口頭では皆「エンゲル」と言っていたそうです。写真は、いまもクリスマス飾り、木工芸で有名な東部ドイツの小さな町ザイフェンの天使。冬場、この地方にいくと窓辺にはこの「羽の生えた年末の像」が並んでいるんですよ！

Jahresendmann（東）/
Weihnachtsmann（西）
「サンタクロース」

ちなみに、サンタクロースも、DDR では年末の男。年末の男……と言われると、忘年会で浮かれているおじちゃんのようなイメージです。日常で耳にすることはほとんどなかったそうですが。しかし、「クリスマス」関連には、これだけ必死に「代用東ドイツ語」をあてているのに同じく宗教的な祝日であるイースターは、全くそういう言葉が出てこないのが興味深いところです。もしかしたら、いろいろ考えたけど、適切な代用語が思いつかなかったのかもしれませんね。

次回は「東ドイツの言葉」第２弾、食べ物や料理の名前に注目してみたいと思います。

※これは derdiedas.jp に 2017 年掲載の記事に加筆修正を加えたものです。

著者プロフィール：
かわち・ひでこ。東京都出身。2000 年からベルリン在住。ベルリン美術大学在学中からライターとして活動。ドイツ大使館のブログ「Young Germany」で旧東ドイツ時代を生きた女性たちにインタビューする「わたしの DDR」不定期連載中。www.berlinbau.net
※コピーライトの記載がない写真はすべて筆者撮影

KUMON
まずは この夏、ドイツ語通信はじめてみませんか?
高度なドイツ語読解力と豊富な語彙力を養成するカリキュラム教材。
復習を重ね、個人のペースで確実に学習を定着させながら
原書が読めるようになることをめざします。
幅広い年齢層の方が通信で学習しています。
ドイツ語を原書で楽しむ経験をご一緒に!
そんな人にお勧めです
基礎からはじめたい!
語彙を増やしたい!
原書が読めるようになりたい!
※通信・通学のいずれかで学習していただけます。
*E-Pencil（イー・ペンシル）は、公文式教材専用リスニング機器です。ご希望の方は別途購入となります。
お問い合わせ、資料請求はフリーダイヤル、またはホームページから!
通話無料 0120-141459 いよいよ語学
受付時間：月～金 9:30～17:30（祝日除く）
くもんドイツ語 検索
公文教育研究会 ドイツ語・フランス語係 〒108-0074 東京都港区高輪４丁目10-18京急第１ビル12F

Berlin in Zeiten der Corona-Pandemie

Dr. Verena Materna, Vorstandsmitglied der DJG Berlin, Molekularbiologin und wissenschaftliche Koordinatorin

Anfang des Jahres hatten wir vom Auftreten des neuen Virus COVID-19 in China erfahren. Wohl kaum jemand rechnete zu diesem Zeitpunkt damit, dass sich daraus schon bald ein globales Problem entwickeln würde. Nachdem in Europa die ersten Fälle, und auch Todesfälle, zunächst in Italien und dann auch in Deutschland bekannt wurden, veränderte auch Berlin sich Mitte März schlagartig, denn die Politik ergriff rasch einschränkende Maßnahmen, um eine Überlastung des Gesundheitssystems zu verhindern und das Leben aller, insbesondere das der Risikogruppen mit den schweren Krankheitsverläufen, zu schützen. Dies führte auf allen Ebenen zu Eingriffen in das öffentliche Leben und zwar in einem Ausmaß, das die meisten Deutschen, zumindest seit dem 2. Weltkrieg, nie erleben mussten. Jetzt, Ende April, leben wir nun schon seit ca. 7 Wochen mit dieser Pandemie. Doch wie sieht das Leben nun für uns aus?

Zunächst mussten alle Restaurants und fast alle Geschäfte schließen, ebenso wie die Schulen und andere Lehreinrichtungen. Alle Veranstaltungsstätten, z. B. Opern- und Konzerthäuser, Museen und Zoos, stellten ihren öffentlichen Betrieb ein. Geöffnet blieben meist nur die Lebensmittelgeschäfte, Apotheken, Krankenhäuser und ähnlich eingestufte sogenannte „systemrelevante“ Bereiche. Die Dankbarkeit gegenüber denen, die in diesen schwierigen Zeiten alles geben, wie z. B. unser medizinisches Personal und auch die Mitarbeiter in den Supermärkten, ist allgemein sehr groß. Doch es gibt auch viele, die sich nicht mehr gebraucht fühlen, Existenzängste haben und sehr einsam sind. Weil beim Shut-down erst einmal alle einen Vorrat anlegen wollten bzw. mussten, gab es zunächst Engpässe bei einigen Waren. Chronisch ausverkauft waren Desinfektionsmittel, Masken und – vielleicht typisch für unser Land – Toilettenpapier. Doch der Handel reagierte schnell, so dass die meisten Dinge nun wieder regelmäßig zur Verfügung stehen.

Hygienevorschriften und Regeln zur Kontakteinschränkung verlangen derzeit von uns, Abstand zu halten. Kein Händeschütteln, keine Umarmungen, auch fröhliches Zusammensitzen in der Gruppe entfällt in diesen Tagen. Wir feiern keine Geburtstage oder andere Höhepunkte, wie z. B. Taufen oder Hochzeiten. Beerdigungen finden ausschließlich im Freien statt. Es sind nur wenige Trauergäste zugelassen, die ihren Lieben die letzte Ehre erweisen dürfen. Auch sonst merkt man gerade jetzt, wie wichtig bestimmte Dinge für uns waren, die wir nun schmerzlich vermissen. Friseurbesuche waren lange Zeit nicht möglich, ab Anfang Mai soll dies unter Auflagen wieder gestattet sein. Restaurantbesuche mit Freunden fallen aus. Man kann – falls überhaupt – in den Lokalen nur Essen zum Mitnehmen bestellen. Doch überall wird versucht, aus der Situation das Beste zu machen. Neue Formate entwickeln sich. Kulturelle Events und Business-Besprechungen finden nun online statt. Dies wird auch verstärkt privat genutzt, um den Kontakt zur Familie und den Freunden zu halten. Manche genießen die Zeit mit der Familie, wenn Eltern und Kinder wieder mehr Zeit gemeinsam verbringen können, doch meist nur dann, wenn genug Platz zur Verfügung steht und vielleicht ein Garten am Haus vorhanden ist. Woanders sind das Arbeiten im Homeoffice und die gleichzeitige Kinderbetreuung oft schwer zu vereinbaren und alle Beteiligten – Kinder wie Eltern – freuen sich auf die Zeiten, wenn hoffentlich alles wieder normal wird. Doch was heißt „normal“ nach einer Pandemie und wie wird die Welt dann aussehen? Welche Firmen und Geschäfte werden diese harten Zeiten überstehen? Werden gewisse Einschränkungen und Verhaltensweisen bleiben? Ich könnte mir z. B. vorstellen, dass man auch nach Abklingen der Corona-Pandemie nicht mehr so oft geschäftlich verreisen wird. Denn man spart mit den aktuellen Videokonferenzen auch Zeit und schont die Umwelt. Doch in vielen Bereichen ist der persönliche Kontakt einfach durch nichts zu ersetzen. Insofern müssen wir jetzt durchhalten und alles dafür tun, dass wir bald wieder unseren Lieblingsbeschäftigungen nachgehen dürfen. Ich träume schon vom nächsten Konzert-, Museums- oder Restaurantbesuch und freue mich schon darauf, dies alles wieder mit der Familie und Freunden erleben zu dürfen. Da Sie in Japan jetzt ebenfalls viele Einschränkungen erleben müssen, geht es Ihnen hiermit sicher ähnlich wie uns in Deutschland. Bitte bleiben auch Sie gesund und zuversichtlich!

コロナ・パンデミック下のベルリン

Dr. ヴェレーナ・マテルナ（ベルリン独日協会理事、分子生物学者、学術コーディネーター）

今年初め、新型コロナウィルスが中国で発生したことを知りました。この時まだ誰もこれが世界的な問題になると考えていませんでした。ヨーロッパでの感染、死者が、最初にイタリアでそしてドイツで報告されると、3月中旬にはベルリンの様子も一転しました。すぐに、医療制度の過重負担をさけるため、そして人々の命、特に重篤化リスクのある重病患者の命を守るために制限政策がとられました。これはあらゆるレベルの公共生活への介入となり、ほとんどのドイツ人が少なくとも第二次世界大戦後経験したことがない大規模なものとなりました。これを書いている4月末の今、パンデミック下の生活はもうすでに7週目となりました。今、私たちの生活はどうでしょうか？

まず､すべてのレストランやほとんどの店､同時に学校や教育施設も閉められました。オペラ座、コンサートホール、ミュージアム、動物園などの施設も営業を中止しました。営業を続けているのは大体は食品店、薬局、病院そして同じように格付けられた、いわゆる「(生活を支えるのに必要な）システム関連」の分野です。この厳しい時期に力を尽くしてくれた､医療関係者やスーパーマーケットのスタッフへの感謝の気持ちを皆が強く感じていますが、自分が役立たずのように思い、不安や孤独を感じている人も多くいます。自宅隔離にあたって、最初に皆、物資の備蓄をしようとしましたが、当初、いくつかの物が不足しました。時系列的に言うと、消毒剤、マスク、そしてどの国でも同じだと思いますが、トイレットペーパーの順に品切れとなりました。しかし、市場の動きは早く、ほとんどの物はまた規則的に補充されるようになりました。

売り切れのトイレットペーパー売場

目下、接触制限を定めた衛生規定により、人との距離を保つことが求められています。握手、抱擁、そしてグループで楽しく集うことも今のところできず、誕生日を祝うことも、洗礼や結婚式などの人生の大事な祝い事もできません。葬儀は屋外でのみ行われ、愛する人の人生の最後に敬意を表すことが許される弔問客はごくわずかです。そしてまさに今､いくつかの事がどれだけ私たちにとって大事で､それを熱望しているか､私たちは気づいたのです。長いこと美容院に行くことができませんが、5月からはこれらも一定の条件下で可能になるでしょう。

友人たちとレストランにいくこともできません。必要であれば、飲食店で持ち帰りのメニューを注文することはできます。至る所で、この状況でもベストを尽くそうとし、新しいやり方が生まれています。文化的なイベントやビジネス会議は今やオンラインで開催されています。プライベートでもオンラインという手段が家族や友人との絆を保つために頻繁に使われるようになりました。親と子が長い時間をともにまた過ごし、これを楽しむ人もいますが、通常は充分なスペースがあり、たとえば家に庭がある場合に限るでしょう。そうでなければ、在宅ワークしながら同時に子どもの面倒を見ることを難しく、子も親も皆、また通常の生活に戻ることを期待しています。しかし、このパンデミック後の「通常」とは何でしょうか？そして、世界はどのなるのでしょうか？どの企業や店がこの厳しい時代を乗り越えられるのでしょうか？どういった規制や行動様式が今後も続くでしょうか？私は、例えばコロナ・パンデミックの収束後はそんなに頻繁に出張できなくなると思います。なぜなら、現在行われているオンライン会議によって時間を節約し、環境も守ることができるからです。しかし、たくさんの分野で、人とのコンタクトを別のもので置き換えることはできません。それゆえに今は我慢して、好きな活動をすぐに再開できるように、できることをしなければなりません。私は今から次コンサート、ミュージアム、レストランに行くことを夢見ていますし、またそれらの体験を家族や友人とわかちあうことを楽しみにしています。皆さんも日本で同じように様々な制限を受けているので、ドイツにいる私たちと同じような心境に違いありません。皆さんもお元気で前向きにお過ごしください！

研修生コラム

Hallo!

Daniel Yamada (Praktikant der JDG)

Mein Name ist Daniel und ich komme aus Wien. Ja, wie Sie natürlich wissen, ist Wien die Hauptstadt Österreichs. Was mich mit Deutschland verbindet, ist mein 20-jähriger Aufenthalt in Berlin. Ich habe in der Stadt an der Spree an der Humboldt-Universität sowie auch an der Freien Universität Japanologie studiert. Der Hintergrund meines Interesses und meiner Liebe zu Japan war ein Tanzengagement unter dem Butohtanz-Choreografen Akira Kasai. Im Jahr 2006/07 habe ich gemeinsam mit 22 anderen japanischen Tänzern in Kokubunji in Kasais Ausbildungsstätte Tenshikan „Haus der Engel“ Butohtanz studiert. Dies war eine der eindrucksvollsten Erfahrungen in meinem Leben. Danach begann ich mit dem Japanologie-Studium.

Es würde mich sehr freuen, während meiner Praktikumszeit gemeinsam nicht nur Deutschlandsbezüge, sondern auch mein Heimatland Österreich und im speziellen die Stadt an der Donau zum Thema zu machen. Während meines Universitätsstudiums war ich ein Jahr an der Waseda-Universität. Nach dem Studienjahr hängte ich ein dreimonatiges Praktikum an der Österreichischen Botschaft in Tokyo an. Kurze Zeit später ereignete sich die Dreifachkatastrophe der Tohoku-Region. Es war eine sehr traurige, unsichere Zeit und gewiss auch eine meiner traumatischsten Zeiten.

Seit Ende Januar 2020 bin ich in Japan. Heute sind wir alle insbesondere vom Corona-Virus bedroht, was nicht minder traumatisch ist. Ich frage mich, warum ich mir ausgerechnet diese Zeiten für meine Japanaufenthalte gewählt habe. Es fühlt sich so an, als wäre es ein besonderes Schicksal. Nun, man sagt, man wächst mit seinen Aufgaben. Und die Aufgabe heute besteht darin, so gut wie möglich diese schwierige Zeit zu überstehen.

Ich freue mich sehr über die Möglichkeit, an der Japanisch-Deutschen Gesellschaft mitwirken zu können. Ich freue mich darauf, viele Mitglieder kennenzulernen und gemeinsam Erfahrungen zu machen. Ich hoffe sehr, dass wir nicht nur online miteinander zu tun haben werden. Mein größter Wunsch ist es, nach dem Praktikum weiterhin in Japan leben zu können. Es ist ein Land, das mir, bei all den Traumata, sehr viel Positives geschenkt hat. Am dankbarsten bin ich für die Selbstrelativierung und Selbstreflexion, die sich einstellt, wenn man als Europäer in Japan lebt. Auf Eure Erfahrungen in Deutschland oder Österreich, auf Fragen und unseren Austausch bin ich sehr neugierig!
In diesem Sinne: Bis sehr bald, und bleiben Sie gesund!

こんにちは！

山田ダニエル（日独協会研修生）

ダニエルです。私はウィーンから来ました。はい、ご存知通りウィーンはオーストリアの首都です。私がドイツと繋がっているのは、ベルリンに 20 年間滞在したからです。シュプレー川が流れている街でフンボルト大学と自由大学で日本学を勉強しました。私の日本への深い興味と愛情の背景には、舞踏の振付家、笠井叡さんの活動への参加があります。2006 年から 2007 年、私は国分寺の「天使館」で 22 人の日本人ダンサーと一緒に舞踏を学びました。これは私の人生で最も印象的な経験の一つでした。この経験から、日本学を学ぶことにしました。

協会でのインターンシップの間に、ドイツについてだけではなく、母国オーストリア、特にドナウ川沿いの街についてもテーマに取り上げることができれば嬉しいです。大学在学中に 1 年間、早稲田大学の日本語課程で学びました。留学に引き続き、東京のオーストリア大使館で 3 ヶ月間のインターンシップをしましたが、その後すぐに、東日本大震災が発生しました。非常に悲しく不安な日々で、私の人生で最も悲劇的な時でした。

今回は 2020 年 1 月末から日本にいます。今日、私たちは皆、新型コロナウイルスに脅かされていますが、大震災の時と同じくらい大変な状況です。これらの困難な時期に日本に滞在することを選んでしまったのはなぜだろうかと自問してしまいますが、それが特別な運命のように感じます。人は危機的状況の中で強くなると思います。そして、今回の課題は、可能な限りうまくこの困難な時期を生き抜くことです。

日独協会で活動する機会をいただけて、とても嬉しく思います。多くの方々と出会い、一緒に文化交流を深めることを楽しみにしています。大変な状況ですがオンラインだけでなく実際に皆さんにお会いできることを待ち望んでいます。インターンシップ終了後も日本で生活を続けていきたいと思っています。今まで大変な経験をした一方、日本はたくさんポジティブな大事なことを与えてくれた国です。ヨーロッパ人として、日本に住んで「自己相対化」と「自己反省」を学ぶことができたことを心から感謝しています。皆さんのドイツやオーストリアでの経験や疑問、私たちの交流に興味津々です！
すぐに会えますように、皆さん健康に気を付けてお過ごしください。

編集後記

■世の中、「新型コロナウイルス」問題で一色。WHO が「100 年に一度のパンデミックと発表した 3 月 11 日以来、各国とも地上での国境封鎖や空港での入国禁止と 14 日間の足止めで感染予防策を取り、国内では外出自粛やロックダウンで経済活動が大幅に抑制され、株式は世界的に暴落、学校は閉鎖、会社での仕事は自宅からオンラインで…ということで、工場稼働や人・モノの輸送に必要な石油消費が大きく減退。4 月 20 日の NY における原油先物価格は、取引最終日を翌日に控えた 5 月物が原油タンクが満杯の為に買い手不在の中で史上初めて－ 40.32 ドルの安値（売り手が買い手に支払う）を見る珍事が発生。一日も早い終息を期待したいが、ミネソタ大学やハーバード公衆衛生大学院では 2022 年まで掛かる見込みとの事。くれぐれもご注意を！（金）

■新型コロナウイルス感染により亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。
ヘッセ『ナルツィスとゴルトムント』ではペストが蔓延した地を舞台に悪人が跋扈する様が一部描かれていますが、各種転売ヤーの報道を耳にしたり、街に突如現れた闇のマスク売りを見たりするたびに人の本質は不変なのだと感じます。「ウイルスとの戦いに勝つ！」という、目に見えないものを共通の敵として仕立て上げ一致団結を呼びかけるスローガンがやたらと喧伝されていますが、何となく戦中のプロパガンダに似たきな臭さが鼻につくのは私だけでしょうか。大きな災厄を前に個々人のモラルが試されている、ただそれだけのことなのではないのでしょうか。（田）

Die Brücke 架け橋
日独協会機関紙「Die Brücke 架け橋」第 712 号　2020 年 6 月 1 日発行／隔月刊
編集責任：柚岡一明（編集長）公益財団法人日独協会
jdg@jdg.or.jp ／電話：03-5368-2326 ／ FAX：03-5368-2065 ／ http://www.jdg.or.jp
住　所：〒160-0016 東京都新宿区信濃町 18（マヤ信濃町 2 番館）／印刷・製本：三和印刷株式会社
禁 無断転載

FUJIFILM
Value from Innovation

「Die Brücke 架け橋」第七二号 令和2年6月1日発行（隔月刊）公益財団法人 日独協会 定価一部三百円

絶対、逃したくない瞬間がある。

フォトグラファー | 辰野 清 KIYOSHI TATSUNO

X-T4

高性能な手ブレ補正機能を搭載し
あらゆるフィールドでの
手持ち撮影を可能にする。
Xシリーズ史上最高性能の
圧倒的なパフォーマンスと、
フィルムメーカーならではの色再現性。
フラッグシップモデルが、
またひとつ進化した。

世界最速※15コマ/秒の高速連写と
最短約0.02秒のAFにより決定的なシーンを逃さない。
小型軽量ボディに高性能な手ブレ補正機能を搭載!
快適に高画質な動画撮影も可能。

※APS-C以上のサイズのセンサーを搭載したミラーレスデジタルカメラとして。
メカニカルシャッター設定時。2020年2月26日時点。当社調べ。

●5軸・最大6.5段のボディ内手ブレ補正機能を搭載 ●フィルムシミュレーションに「ETERNA ブリーチバイパス」を追加
●4K/60P 10bit 動画撮影機能、電子式手ブレ補正機能を搭載 ●新開発の大容量バッテリーにより約500枚の連続撮影が可能

http://fujifilm-x.com/ja/

富士フイルムデジタルカメラサポートセンター TEL:050-3786-1060（ご利用いただけない場合:0228-30-2992）受付時間:月曜～金曜 9:30～17:30／土曜・日曜・祝日 10:00～17:00